シンポジウム　今川館（いまがわやかた）の姿にせまる

資料集

静　岡　市

シンポジウム　今川館（いまがわやかた）の姿にせまる
資料集

静　岡　市

シンポジウム　今川館の姿にせまる　　日程

日時　令和５（2023）年２月４日（土）
会場　静岡市民文化会館大ホール（静岡市葵区駿府町 2-90）
主催　静岡市（観光交流文化局歴史文化課）

10：00	開会あいさつ
10:05～10：50	＜第１部＞戦国大名今川氏の本拠地　駿府 講演①駿府における今川氏・家臣たちの日常 小和田哲男氏（静岡大学名誉教授）
	（休憩）
11:00～11:45	講演②戦国大名の町づくり～駿府の構造と特徴～ 仁木宏氏（大阪公立大学大学院文学研究科教授）
	（昼休憩）
13:00～13:45	＜第２部＞今川館を考える 講演③戦国大名の館と陶磁器 小野正敏氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）
	（休憩）
13:55～15:55	パネルディスカッション パネラー：小和田哲男氏、仁木宏氏、小野正敏氏、河合修氏（静岡県文化財課） 司会：松下高之（静岡市歴史文化課）、小泉祐紀（静岡市文化財課）
16：00	閉会

例　言

１　本書は、令和５（2023）年２月４日に静岡市民文化会館大ホールにて開催のシンポジウム「今川館の姿にせまる」の資料集である。
２　シンポジウムは、静岡市（観光交流文化局歴史文化課）が主催し、静岡市文化財課、静岡県文化財課の協力を得て開催。
３　本書は、静岡市歴史文化課が静岡市文化財課の協力を得て編集した。
４　引用の際は、本書名、報文名、著者名等を明示すること。

シンポジウム　今川館の姿にせまる

資料集目次

例言・シンポジウム日程　1
シンポジウム資料集目次　2
＜講演要旨＞
駿府における今川氏・家臣たちの日常……小和田哲男　3
戦国大名の町づくり～駿府の構造と特徴～……仁木宏　7
戦国大名の館と陶磁器……小野正敏　15
＜報告＞
駿府城内遺跡における陶磁器・土器の出土傾向……河合修　21
中世駿府の池状遺構……山本宏司　27
＜補足資料編＞
関連年表　33
今川氏・今川館関係史料表……廣田浩治、鈴木将典
　今川館・被官屋敷・駿府関連史料表　35
　公家山科言継の日記『言継卿記』の駿府在住今川家臣・侍女　41
　史料本文　44

＜講演要旨①＞

駿府における今川氏・家臣たちの日常

静岡大学名誉教授・文学博士
小和田　哲男

はじめに

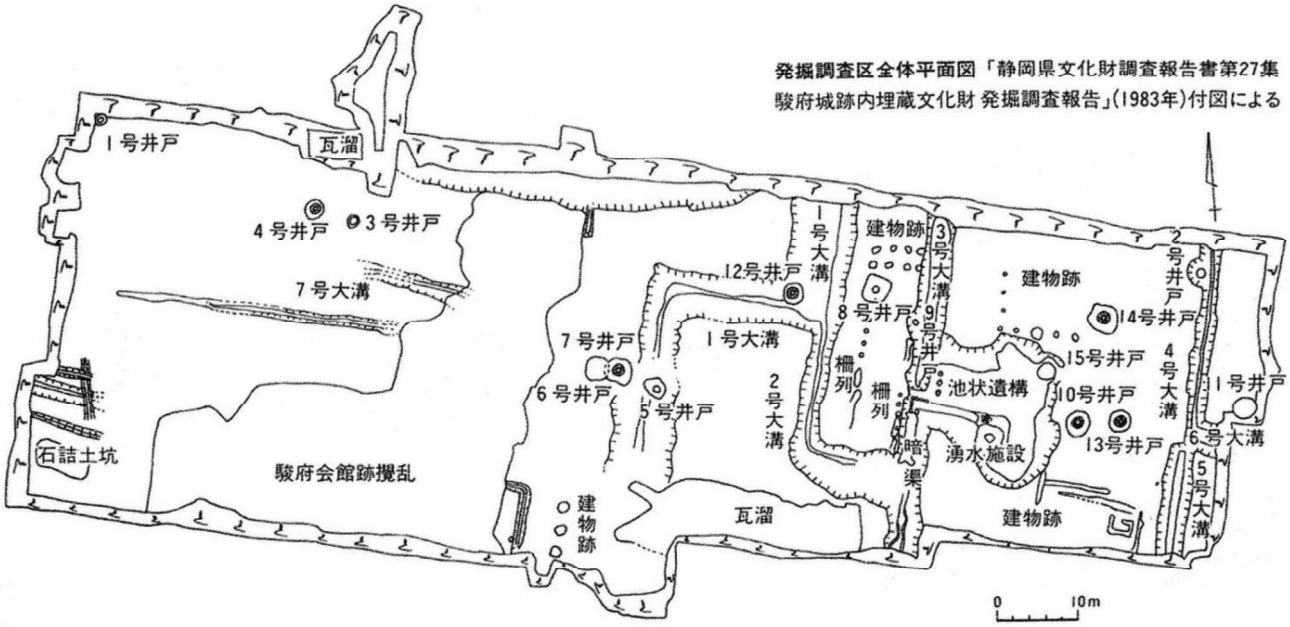
１．近世駿府城と同じ場所にあった今川館

昭和 57 年（1982）の発掘調査から

静岡県立美術館予定地の発掘　7800 ㎡

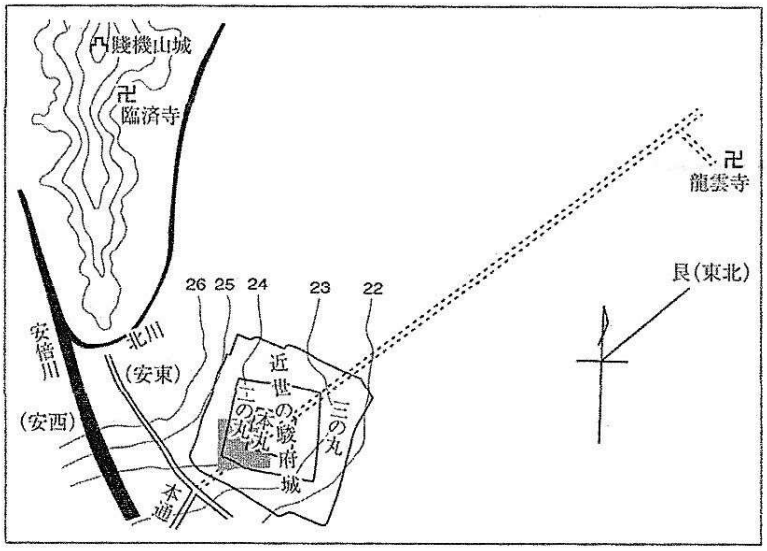
大溝・桂穴・暗渠・井戸・池などの遺構の出土

陶磁器・古銭・金細工などの遺物の出土



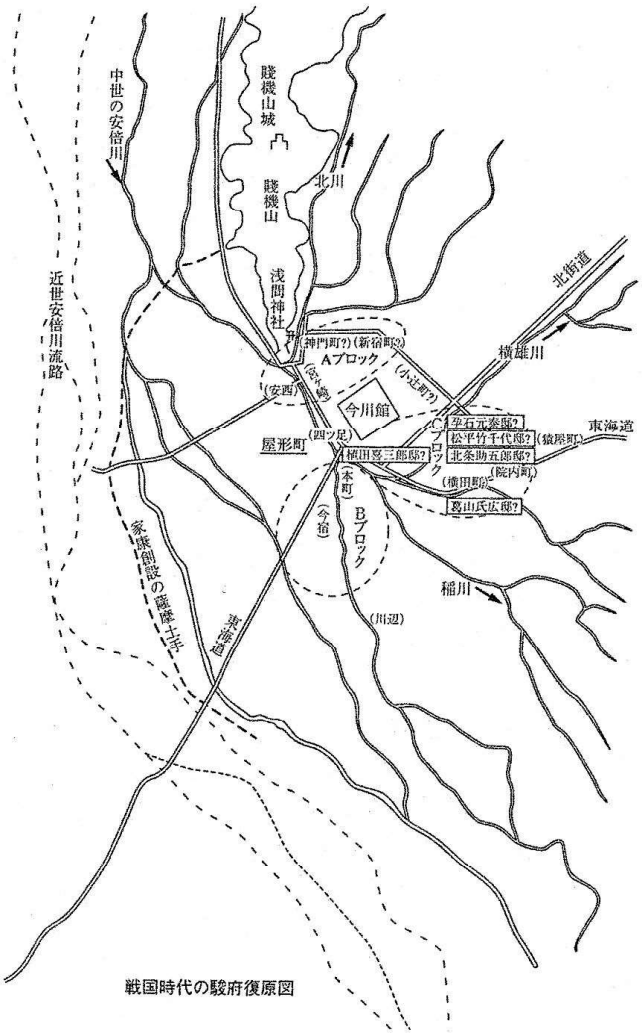
その後の発掘調査から

傍証資料としての龍雲寺



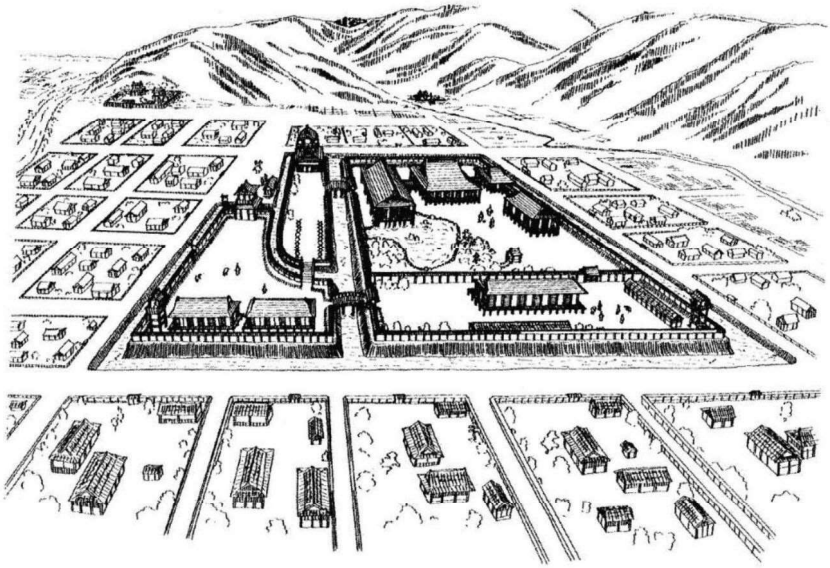
小和田哲男著『今川義元 知られざる実像』

２．全家臣団の集住ではなかった城下町駿府
　　今川館の近くに重臣屋敷は配されていた



戦国時代の駿府復原図

小和田哲男著作集 第１巻『今川氏の研究』



静岡県文化財団編『今川時代とその文化』

公家たちの屋敷はどこにあったか
　短期間の場合は寺に寄宿

３．今川時代駿府の文化的環境
京都を模した町づくり　　清水寺・愛宕山・八幡山

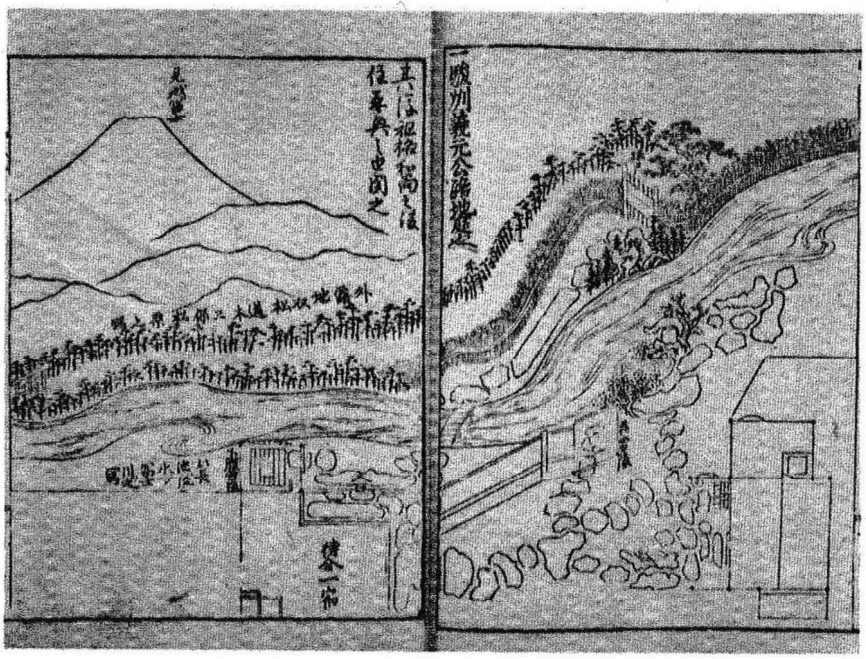
茶の湯を嗜んでいた今川氏家臣たち
　堺の津田宗達の茶会に招かれた二人

　茶筅・茶杓が贈り物となっていた

同四月八日朝、人数関口刑部（するがの国）少輔将岡辺
一、だいす（台子）　平釜　桶　がうし　柄杓立
一、床　船子、懸候、
一、床　文琳壺、四方盆に、少脇に、
一、台天目、籠より、但、後はだいす上に、
一、珠徳茶杓、かうらい（高麗）茶碗、すゞ

『宗達自会記』

「駿州義元公路地庭」の図



『古今茶道全書』所収の「駿州義元公路地庭」
米原正義著『戦国武将と茶の湯』

今川館に茶室があった

名物茶器を所持していた今川義元

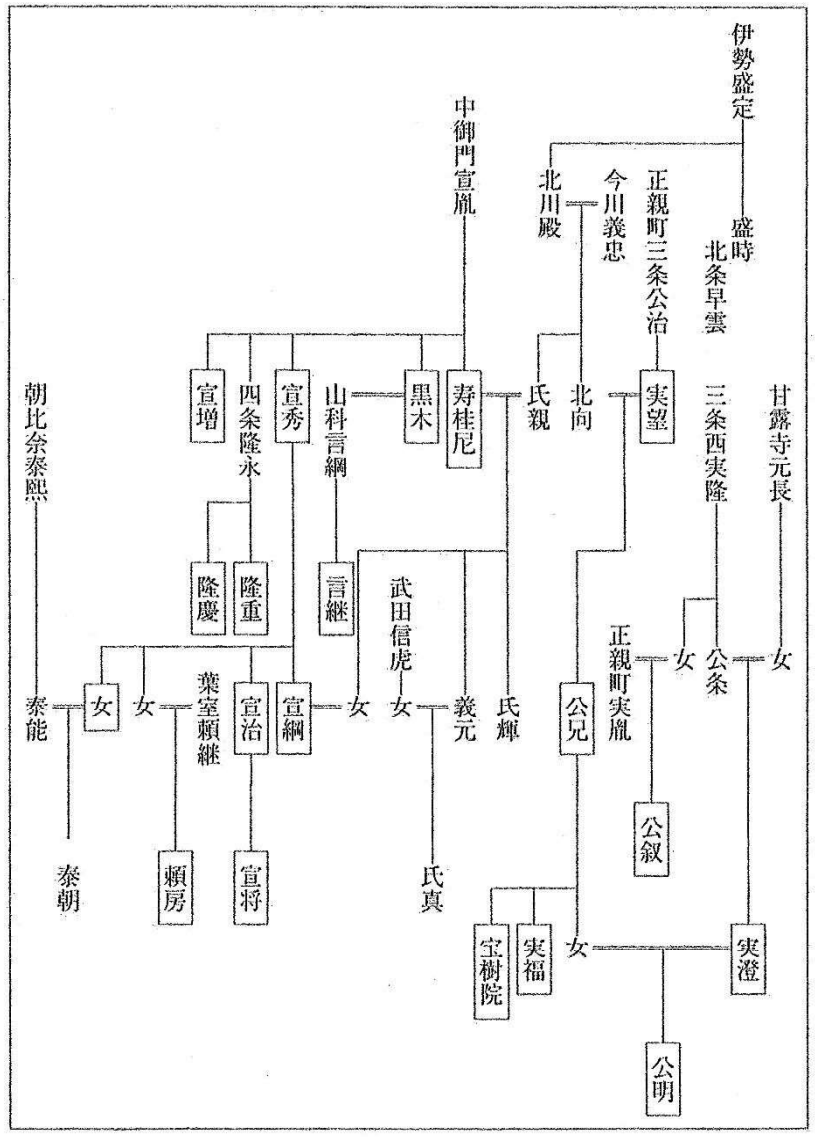
和歌・連歌で結束を固めていた今川氏

連歌師宗長と今川氏親

毎月 13 日の「月次会」

能・狂言・香も盛んだった

駿府流寓公家との交流



今川家と公家との関係略系図（□は駿府下向者）

小和田哲男著『今川義元』

おわりに

＜講演要旨②＞

戦国大名の町づくり　～駿府の構造と特徴～

大阪公立大学　仁木　宏

はじめに

1960 年代；戦国時代に城下町は「なかった」　←近世城下町との比較

1970 年代～；越前国一乗谷城下町（福井市、朝倉氏）の発掘

＊その後、各地で戦国期城下町を発掘……周防国山口（山口市、大内氏）

豊後国府内（大分市、大友氏）など

1980 年代～；文献史・考古学・城郭史・歴史地理学などによる学際的研究

＊小島道裕、千田嘉博、前川要

2000 年代～；守護所→戦国期城下町→織豊期城下町→近世城下町　～一連の流れ

都市空間の具体的復元。　研究の全国への広がり

2010 年代～；戦国大名像の変化

官僚・支配機構研究。家臣（国人）の自律性

「公儀」；人民・地域社会との「相互性」

幕府・京都との結びつき

2020 年代；戦国期城下町研究の新たな段階

家臣の集住・機能。都市経済・流通。住人の「生活」

大名領国のなかでの位置　～評定、訴訟・裁判

大名領国を越えて　～京都（幕府）との関係、全国流通・地域経済圏

＊文献史；一次史料へのこだわり　⇔　二次史料（近世、地誌）と「距離」

◆私の講演の目標

1. 戦国時代の今川館と駿府はどこまで復元できるか？
2. 城下町駿府を、他の大名の城下町と比較して評価する

1．なぜ戦国時代の今川氏は駿府を本拠としたのか？

1．地理環境

安倍川の流路　扇状地の広がり　→　駿府城（今川館？）；扇頭に位置する

薩摩土手築造以前　→　稲川、北川、横雄川の流量多い　but　乱流域ではない

交通路；中世東海道＝手越付近で安倍川を渡河→駿府を抜け→清水湊方面へ

北街道

※東海道が安倍川を渡河する、東側の河畔。安倍川の水運？　物資の集積

条里地割

清水（港湾）との関係

2．国府と府中

比定地・広がり～駿府城付近から北安東地区（長谷通り）一帯

国分寺？　　惣社＝神部神社（浅間神社のうち）

国府から府中へ

浅間神社

1224 年までには惣社・富士新宮・奈吾屋社が整っていた。

国分寺・久能寺などが供僧寺に

14 世紀なかば　駿河守護今川氏から崇敬

15 世紀後半、惣社・富士新宮・奈吾屋社の三社で「駿府浅間社」

16 世紀、国守が守るべき信仰拠点

★古代以来の駿河国の中心としての由緒・伝統　→　守護今川氏が重要視

2．今川館と家臣団屋敷

1．今川館の位置と機能

現在の駿府城公園の南西隅のあたりからその西外側

複数の館からなる館群～義元時代

義元館・氏真館・寿桂尼館など　　★今川館は「ひとつ」ではない

義元館（今川当主館）が中核

ケの空間；家族、近臣（奏者・取次）などが暮らす

ハレの場＝政庁機能；評定、訴訟（裁判）、文書発給

宿老、評定衆、奉行人などが恒常的に勤務

領国内の各層・各集団（武士、寺社、百姓）が「参府」して訴え

酒宴、連歌会、芸能

2．家臣団屋敷の広がり

駿河の武士（被官・国衆）；有力者は在駿府。下級武士も一部

今川氏が認可し、在府被官に支援・補助

※『言継卿記』（1556～57 年に駿府滞在）に記された家臣たち

一家衆；瀬名、各和、新野

宿老級；朝比奈一族、蒲原、関口、三浦

有力者の一族；庵原、岡部、葛山、由比

側近；一宮、飯尾、齊藤、牟礼　　など

宿老・奉行人などとして今川館に出仕

駿府での屋敷の位置；ほとんど不明

海老江氏：「横田」　庵原氏：新光明寺近く　植田氏：「四足」

遠江；朝比奈氏など　三河；松平元康や一族　　～駿河国衆にくらべると少数

←在府奉公より、前線・現地での配備・城番を優先

氏真期；在駿府を示す史料が激減

多くの武士（国人）は在地（農村）に本拠

本拠に正妻・嫡子？　　人質として駿府に居住することも？

正月には参府

★近世城下町のように、大名館の周囲に集まっているとは考えないでよい

本拠は在地にあり、有力国人はそこに城館・城下

主従制によって駿府に集住させられているのではなく、官僚として出府

★駿府のなかに散在

家臣屋敷、寺院境内、町家が近接・混住

３．駿府城下町の構造

1．戦国時代の一次史料で確認できる地名

・「府内横田」　1544 年　海老江弥三郎（武士）居屋敷

「当府内寺中屋敷」　1509 年

「府内志田垣屋敷」　1566 年　　＊「府中天沢寺」とあり

・「府中にしのつら」1526・1528 年　彦八（の居所？）

「府中四足町」　1569 年　　四条清四郎（地下人？）居屋敷

＊「四足」　　1566 年　　植田喜三郎屋敷

「府中窪之町」　1570 年　　斎藤四郎左衛門（武士？）屋敷

＊「窪道場」1509 年

★狭義の「府中」とよばれる領域があった？　　「府内」が広領域概念？

・「安東」　1542 年　安東築地屋敷（神事祭礼無役）

＊1509 年　南安東

「神門辻」　1551 年

・「安西郷」　1509 年

「安西」　1530 年　安西寺かた　　1532 年　寺領屋敷田畠　　1570 年　つゝの屋敷

・「宮崎」　　1570 年　御神領宮崎　立市可売買〔武田氏〕

・「今宿」　　1570 年　雷宮屋敷・御神領（5 貫文之処）〔武田氏〕

＊「今宿」；梅屋町・人宿町・七間町付近（『駿河志料』）

＊今宿以外の「宿」（商人宿）の存在が確認される　1566 年　1575 年〔武田氏〕

★宮崎の「立市」、今宿などが 16 世紀第 3 四半期に初見することの意味は？

・「川原」1526・1528 年　彦八の新屋敷；皮革の作業をするための場？

「河原」1548　　旦過の河原屋敷

2．寺社の立地

戦国時代の一次史料で確認できる寺社

新長谷寺　1501 年　1528 年　1530 年

宝樹院　　1509 年

国分寺　　1530 年　1544 年　　1556 年　　1557 年

一花堂・長善寺　　1532 年　1544 年　　1561 年　　1566 年

臨済寺　　1551 年　　1556 年

新光明寺　1556 年

華陽院　　1556 年

天沢寺　　1566 年　　「府中天沢寺」

近世の地誌・寺誌からさぐる　　＊西暦は開基年次　　＊寺院名はより確証高い

安東；国分寺（真言宗、～1242 年）、長谷寺（真言宗、～1528 年）

馬場町；報身寺（浄土宗、1247 年）、安西寺（時宗、1317 年）

大岩；天沢寺（臨済宗、1560 年）、臨済寺（臨済宗 1536 年）、天徳院（曹洞宗）、
松源寺（臨済宗、16 世紀中ごろ？）

横内（北街道）；法伝寺（浄土宗、16 世紀中ごろ？）

伝馬町（東海道）；華陽院（浄土宗、16 世紀前半？）

安西；本行寺（法華宗、15 世紀はじめ？）

城内；新光明寺（浄土宗、1511 年？）、善然寺（浄土宗、1521 年）

藤右衛門町（「今宿」）；雷電寺（修験）

寺町；妙像寺（法華宗、～1288 年）

本通町；長善寺（時宗、1320 年）、養国寺（浄土宗、1492～1500 年）
修福寺（時宗、1532 年～）、菩提樹院（臨済宗）

★都市的な場の広がり；時代と地区が並行

・安東・馬場町に鎌倉創建の寺院……真言・浄土・時宗

・南の東海道（本通など）にも鎌倉創建の寺院……浄土・時宗・法華

・大岩……16 世紀に今川氏の庇護下で、臨済

・横内（北街道）、伝馬町（東の東海道）、のちの城内……16 世紀、浄土

3．発掘調査の成果

4. 今川館と城下町　～想定復元と評価

1. ここまでのまとめから

府中　　「市街不連続、機能結節型都市」（金田章裕）

駿府城公園付近～長谷通り　　館、倉庫、民屋、国分寺、惣社

扇頭部の安定した地形

安倍川からの流路（用水）の結節点を掌握　　＊条里地域＝穀倉地帯

中世における変化～浅間神社と東海道

都市的な場の境域　　＊国府・府中の館などは衰退？

浅間神社が中心核？　　安東・馬場付近；密教系、浄土系、時宗寺院

南の東海道（安倍川渡河点に向かって）；浄土、時宗

駿河守護今川氏の拠点に

守護所　→在国にともなう館群の発達　　＊狭義の「府中」？

家臣団の集住、商人・職人、御用商人（友野・松木ら）登場

臨済宗（今川氏）、浄土宗、法華宗（商人）寺院の増加

交易空間～今宿　　＊梅屋町・人宿町・七間町付近か？　別雷神社ごと移転？

宮崎

周縁部；南の東海道（本通り）、安西、東の東海道（横田など）、北街道

惣構は？　　山城（賤機山城）は？

2. 他の戦国期城下町との比較から駿府を評価する

越後国（新潟県）春日山城・直江津＝長尾・上杉氏

能登国（石川県）七尾＝畠山氏

越前国（福井県）一乗谷＝朝倉氏

若狭国（福井県）小浜；武田氏

甲斐国（山梨県）甲府；武田氏

尾張国（愛知県）清須など；斯波氏、織田氏

美濃国（岐阜県）革手など；土岐氏

近江国（滋賀県）観音寺・石寺；六角氏

播磨国（兵庫県）姫路など；赤松氏

周防国（山口県）山口；大内氏

阿波国（徳島県）勝瑞；三好氏

豊後国（大分県）府中；大友氏

・先行する府中との関係

・港町との関係

・平地の城館群　　・家臣屋敷の配置　　※大名の権力構造

・直線的な道路

・山城の使い方

・寺院の宗派

・交易空間の立地　　※大名館、家臣屋敷、寺院、町家地区が入り組む

※求心性と遠心性

　駿府にいないから重臣でないとは限らない

★城下町構造から今川氏権力を評価する

おわりに

これだけの大名の、これだけの城下が……

　全国と比較して研究の「遅れ」　→　本シンポジウムで研究の最先端へ

発掘調査への期待

　城下町部分も発掘を！

徳川駿府城下町へのつながり

【参考文献】

大石泰史　2020　『城の政治戦略』角川選書

小和田哲男 2000　『今川氏の研究』著作集 1、清文堂

小和田哲男 2002　『戦国城下町の研究』著作集 7、清文堂

河合　修　2006　「駿府」仁木宏他編『守護所と戦国城下町』高志書院

金田章裕　2002　『古代景観史の探究　宮都・国府・地割』吉川弘文館

小泉祐紀　2021　「道路遺構と石垣の評価」三ノ丸報告書、市教育委員会

小泉祐紀　2021　「発掘調査と埋没地形からみた中世以前の駿府」向坂鋼二先生米寿記念論集『地域と考古学』Ⅱ、同論集刊行会

新谷和之　2018　『戦国期六角氏権力と地域社会』思文閣出版

鈴木将典　2020　「豊臣大名中村氏の駿河入国と地域社会」『駒沢史学』94

仁木宏他編 2006　『守護所と戦国城下町』高志書院

仁木　宏　2014　「戦国時代の城下町における「町づくり」　－1575 年、駿河国駿府（静岡市）の事例から－」『都市文化研究』16

仁木宏他編 2017　『守護所・戦国城下町の構造と社会　－阿波国勝瑞－』思文閣出版

仁木宏編　2021　『戦国・織豊期の地域社会と城下町』東国編・西国編、戎光祥出版

廣田浩治　2020　「家康政権期の都市駿府と駿河の在地社会」渡邊大門編『日本中近世の権力と社会』歴史と文化の研究所、2020 年

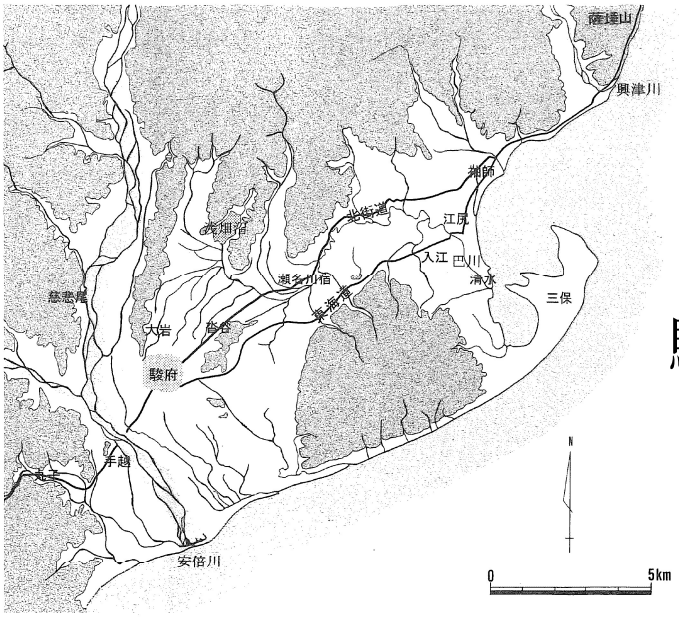
若尾俊平　1983　『江戸時代の駿府新考』静岡谷島屋

『静岡県史』通史編（有光友學ら執筆）、史料編

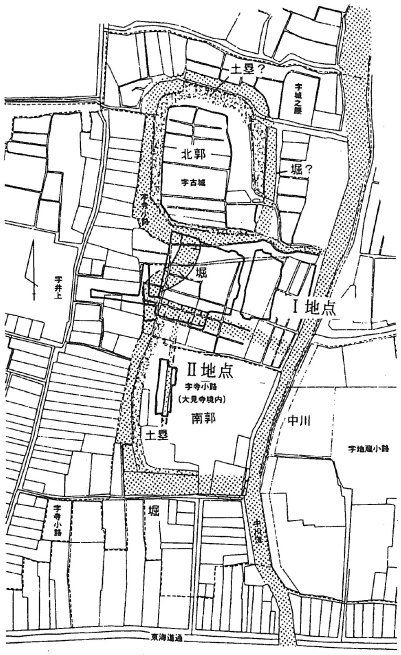
『静岡市史』原始古代中世（小和田執筆）、史料編

『静岡県の地名』（日本歴史地名大系）平凡社

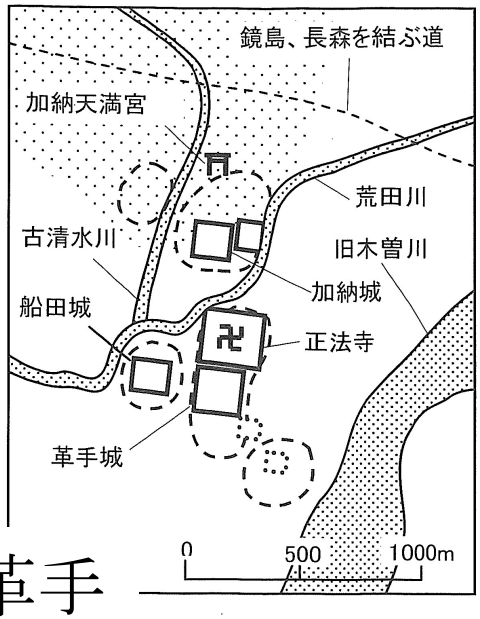
★詳細な参考資料を提供いただいた静岡市・静岡県の文化財部局の方々に御礼を申し上げます。



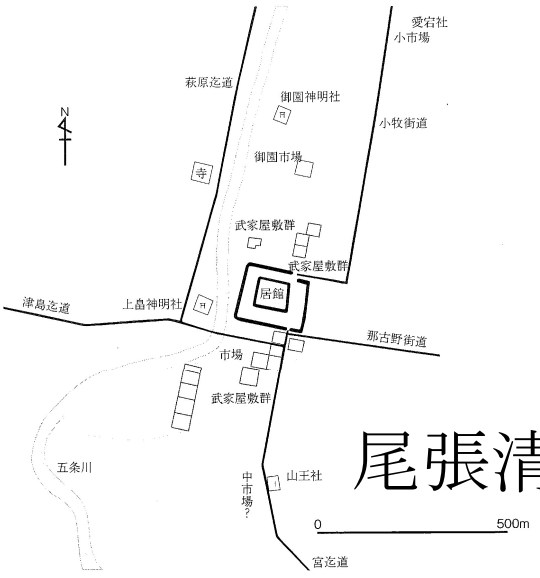
駿河駿府と清水



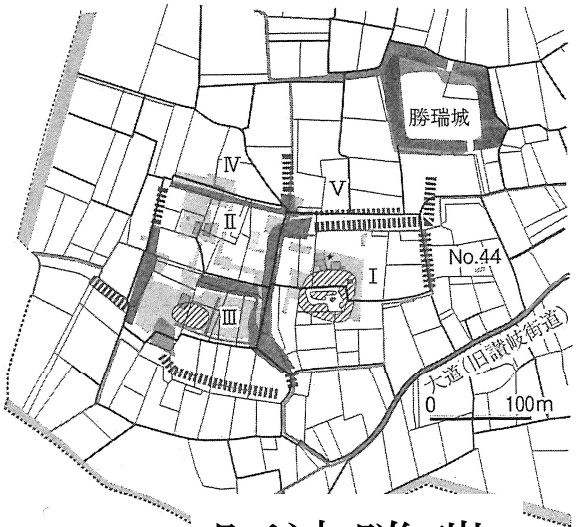
遠江見付



美濃革手



尾張清須



阿波勝瑞

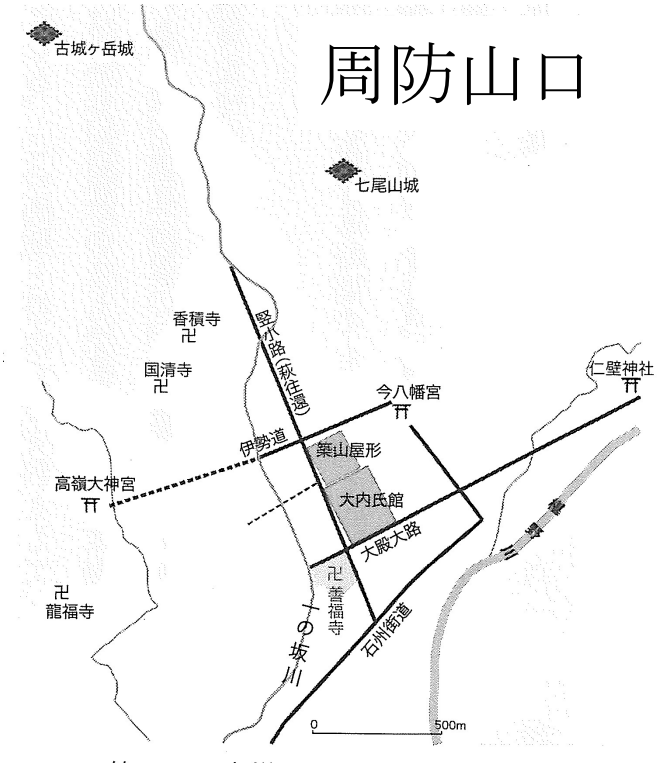
図版の出典

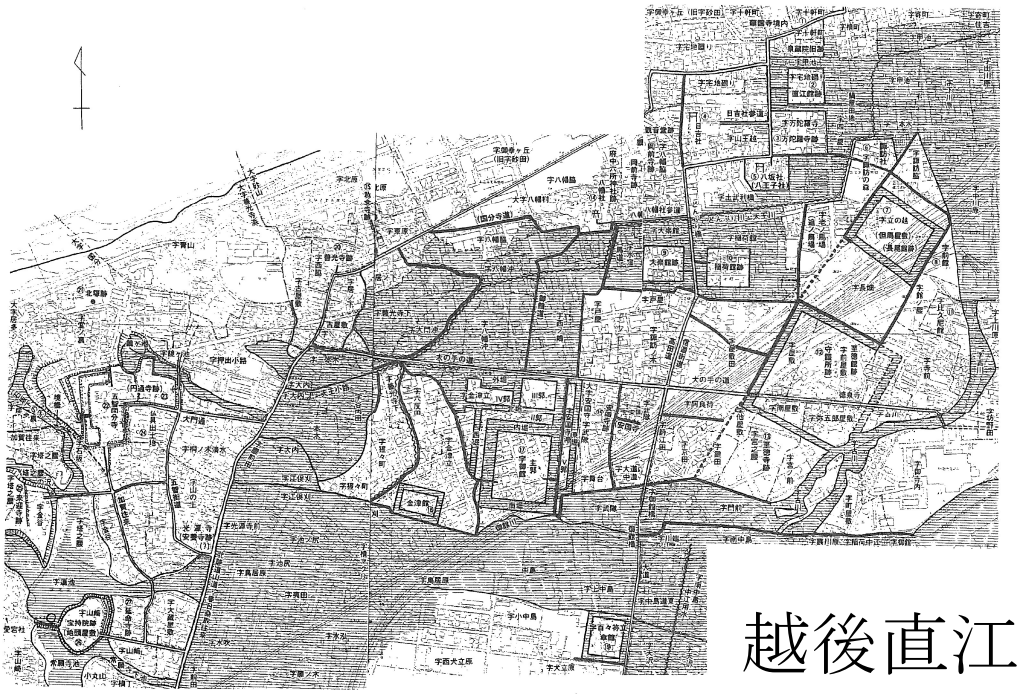
仁木宏他編『守護所と戦国城下町』高志書院、2006 年所収

河合修氏、溝口彰啓氏、鈴木正貴氏、内堀信雄氏、古賀信幸氏、下仲隆浩氏、中西聰氏の各論文

仁木宏編『戦国・織豊期の地域社会と城下町』西国編、戎光祥出版、2021 年所収

石井伸夫氏の論文





＜講演要旨③＞

戦国大名の館と陶磁器

国立歴史民俗博物館名誉教授　小野正敏

今川期の駿河府中―駿府についてはいまだ不明なことが多い。町の核である今川館ですらその位置が確定できていないのが現状である。これは天正期の徳川家康による駿府城築城をはじめ、その後の城郭拡張や城下町建設が、ほぼ同じ地域に重なり、それにより埋没、あるいは破壊を受け、さらには、その後も現代までつながる県都として都市改造を重ねたことによる。発掘の成果では古代の駿河国府も同じ一画に推定されており、実に古代から現代まで駿河の中心が重複し続けためずらしい場所ともいえる。

こうした中、近年の駿府城とその周辺の考古学的な調査の結果から、下層に断片的に残された今川期の遺構や遺物、特に館・屋敷を区画する大溝や高級貿易陶磁に注目して、今川館や府中の中核部を解明する試みが呈示されている（河合修　2006「街道一の弓取りの都市　駿府」『守護所と戦国城下町』、小泉祐紀　2021「発掘調査と埋没地形からみた中世以前の駿府」『地域と考古学Ⅱ』など)。

今回は、そうした成果に学びながら、今川館を考えるうえで参考になる各地の戦国大名の館の発掘例から有効な事例を紹介する。特に、大名クラスの館を特徴づける外構や空間原理、庭園とともにハレの空間を構成する諸施設、また、そうした場で使われた唐物陶磁などに焦点をあててみたい。

１　駿府今川期の発掘成果から

１）「大溝」の区画　（図１）

・概ね東西南北の正方位を志向するものと大きくずれるグループがある

・各々の軸は前代から継承されている各地区の街道・町並みなどを反映か。これはその後の駿府城の堀などにも継承されている

・大溝には、規模や構造にバラエティーがある。時期や機能の違いか？

２）発掘された庭園遺構　（図２）

・二の丸西北部の州浜をもつ大規模な池庭、県立美術館の庭園か？城内中学校の庭園か？

３）戦国期の出土唐物陶磁

・天守台に先行する時期の唐物陶磁群

・二の丸（県立美術館)、三の丸（雙葉学園）の唐物陶磁群

２　発掘された戦国大名の館景観と機能

１）館の空間原理と諸施設―庭園に注目して

・越前一乗谷朝倉館　（図３）

ハレとケ、表と奥から成る館内の空間原理

ハレ空間；表（主殿＋広庭）と奥（会所＋庭園）、都と周辺の空間構成に比定すると
・大名館から町屋まで各階層の屋敷が発掘された一乗谷では、庭園、特に池庭が示す顕著な階層性と規制が確認できる
２）豊後府内大友館と常陸小田城本丸　（図４，５、６）
・守護系大名の館にみる外構と庭園の特徴。朝倉館とは異なる様式
・伝統的な守護ではないが大友館と同じ景観を志向した小田城と相模小田原城北条氏政館の空間構成と庭園、
・北条氏領国内での比較、武蔵八王子城北条氏照館
３）大名館にみる都と地方
・「朝倉亭御成記」「朝倉始末記」（朝倉館）、「当家年中作法日記」（大友館）、「八戸家伝記」（八戸南部氏根城）が語る中央からの選択的導入と独自性

３　唐物陶磁の役割

１）大名館から出土した唐物陶磁　（図７）
・酒器にルーツをもつ武家の唐物威信財
・なぜよく似た唐物セットをもつのか
２）史料にみる御成の場と室礼　（図８）

４　「今川館」を探すーないものねだりと課題

・

図版作成に使用した文献等

静岡市教委　2010「駿府城跡Ⅸ―駿府公園再整備第４工区発掘調査報告書（遺構編）」
静岡市　2018「駿府城ガイドブック　駿府城まるわかり」
静岡市　2020「駿府城天守台まるごと発掘④」令和元年度発掘調査概報
福井県教委　1979「朝倉館の調査」朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ
つくば市教委　2015「国指定史跡　小田城」
小田原市教委　2016「史跡小田原城御用米曲輪発掘調査概要報告」
五十川雄也　2016「豊後府内・大友館の調査成果」『発掘調査成果でみる１６世紀大名居館の諸相』
佐々木健策　2016「相模小田原、北条氏城館の調査成果―御用米曲輪の発掘調査成果」『発掘調査成果でみる１６世紀大名居館の諸相』

＊小野正敏　2017「館・屋敷をどう読むか一戦国期大名館を素材に」『遺跡に読む中世史』

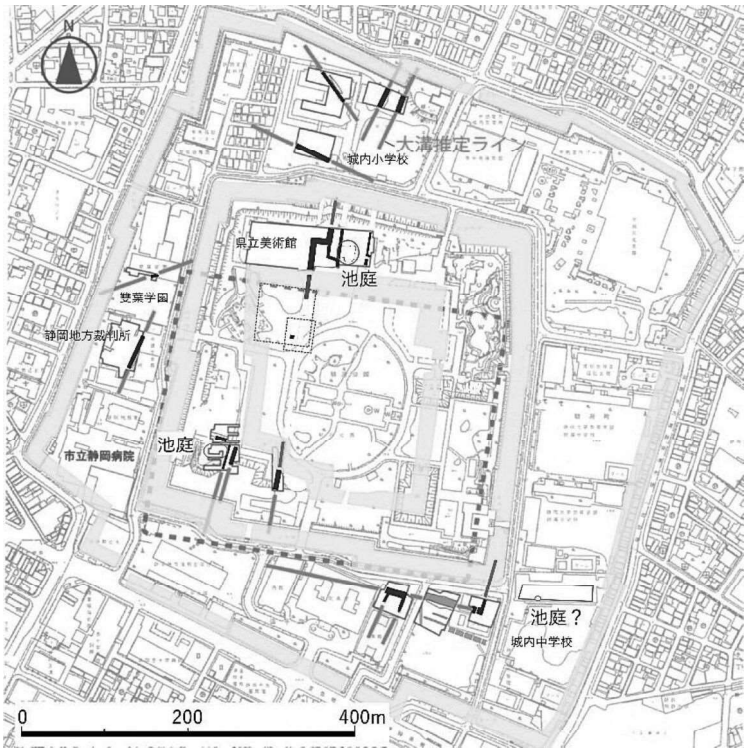


図１　駿府城周辺の大溝

天主台下層の薬研堀
（静岡市教委提供）

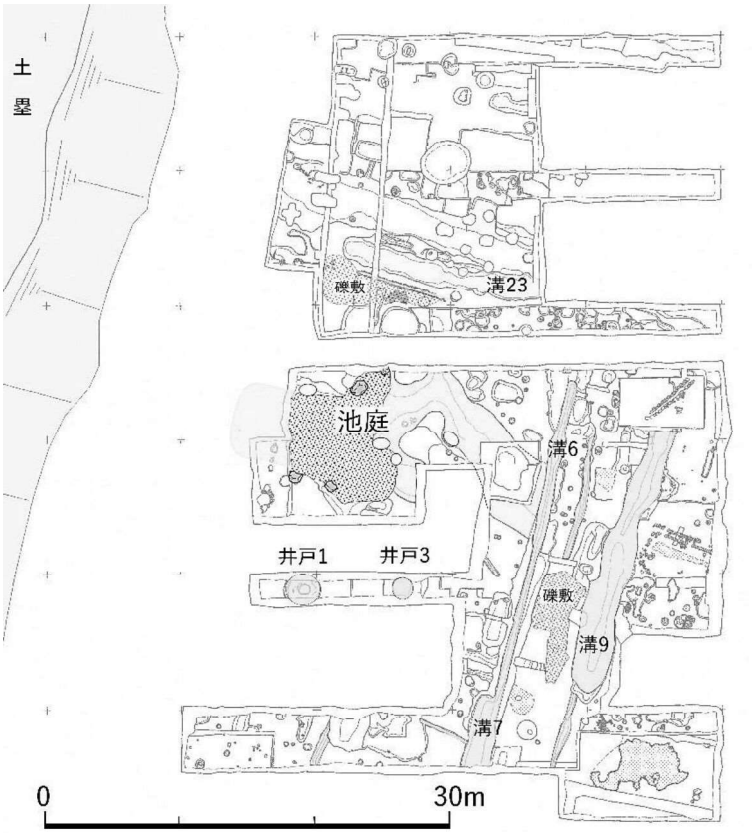


図２　西の丸西北部の州浜
をもつ池庭と大溝

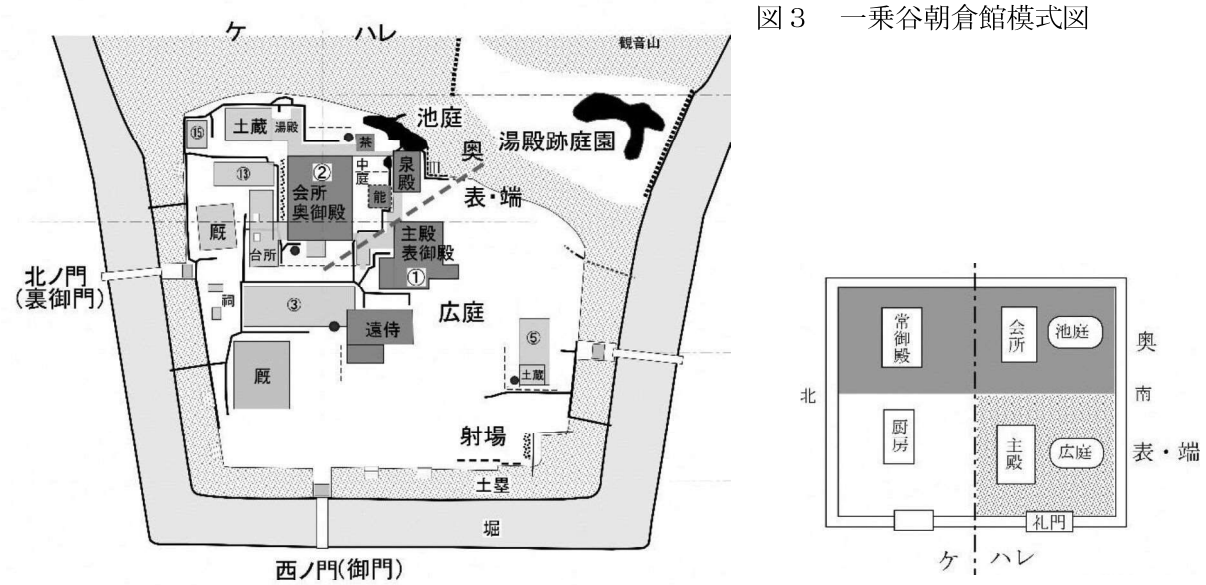


図３　一乗谷朝倉館模式図

図４　豊後府内大友館東半部模式図

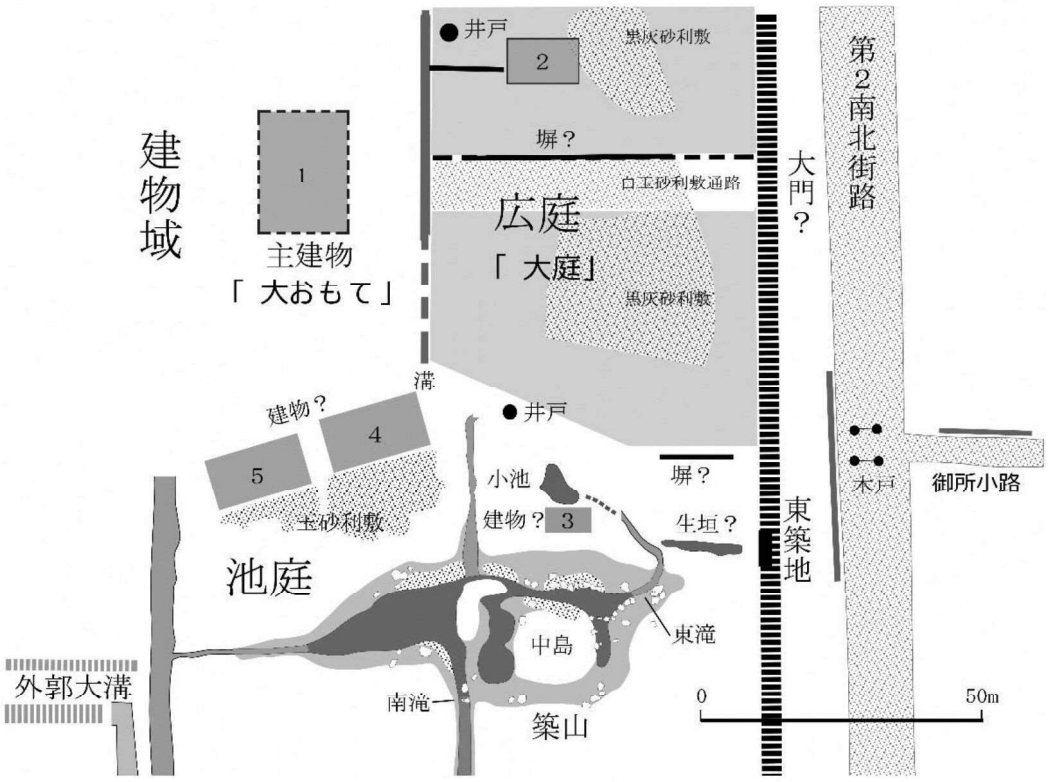


図５　常陸小田城模式図

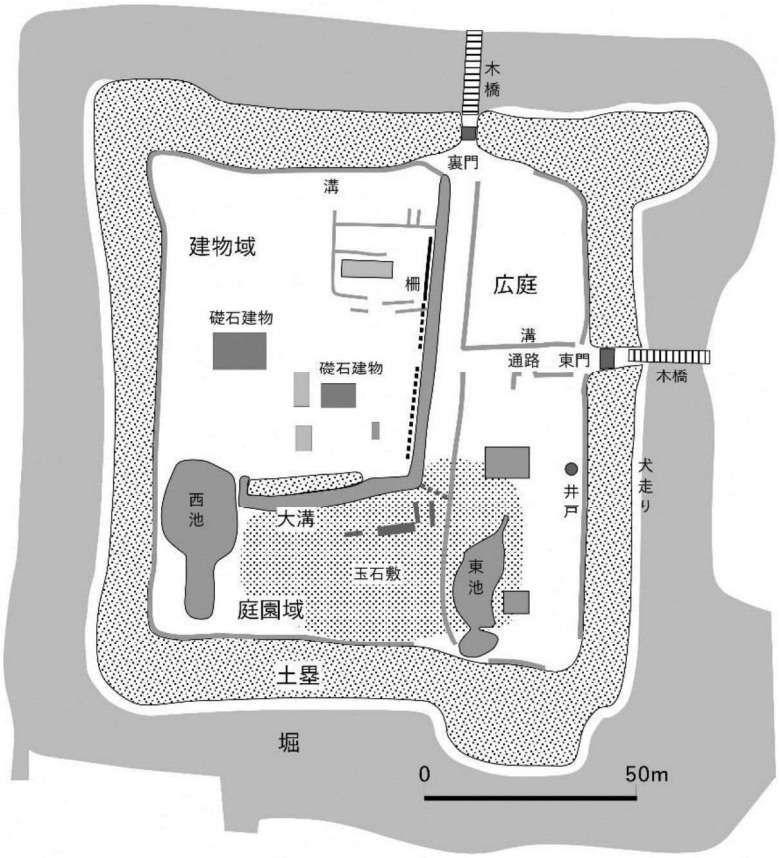


図６　相模小田原城北条氏政館模式図

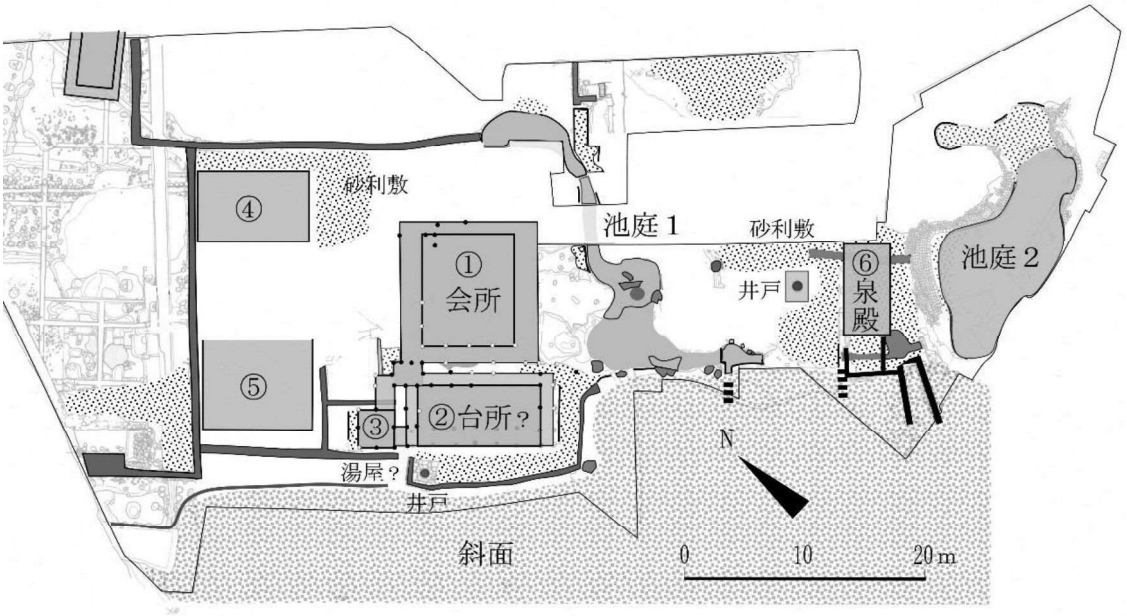
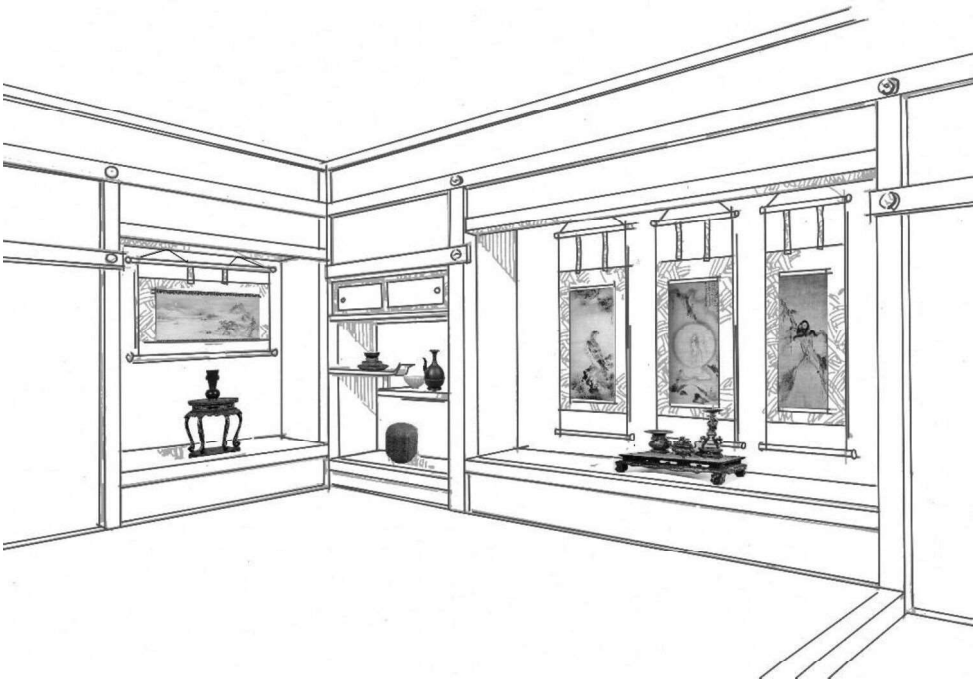


図７　宴会を描いた 15 世紀の絵巻

図８　朝倉館足利義昭元服の御成座敷の室礼復元



＜報告①＞

駿府城内遺跡における陶磁器・土器の出土傾向

静岡県文化財課　河合　修

はじめに

駿府城内遺跡は、江戸時代の城郭である駿府城跡よりも一回り大きな範囲に埋没していることが知られる、南北朝時代から戦国時代にかけて守護職にあった今川氏が育んだ街を主体とした遺跡である。これまで駿府城二ノ丸～三ノ丸の範囲を中心に、およそ 30 件の発掘調査が実施されており、駿府城とその城下町の造営以前にあった街の様子が明らかになりつつある。

今回は、出土した陶磁器や土器のカウントが進んでいる８地点の内容を比較することを通して、南北朝時代から戦国時代の駿府の様子を垣間見ることとする。

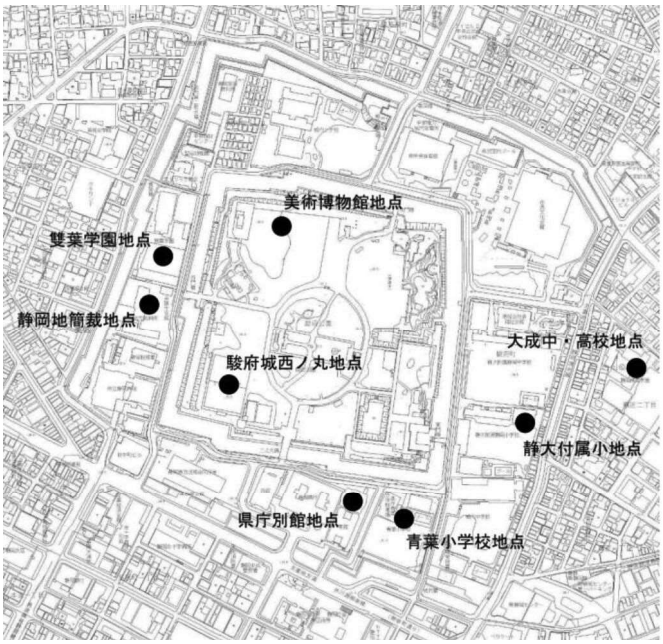


図１　比較検討する地点の位置と名称

１　国産陶磁器の出土傾向

各地点で出土した南北朝時代～戦国時代の陶磁器を産地別に分類した上、それぞれの器種を生産された時期ごとに細分することで、各地点に住んでいた者が、いつ、どれだけのものを持ち、消費していたかを把握することができる。今回は、各地点の出土量を 100 ㎡あたり見込み量としてそろえることにより、地点間の比較検討を可能とした。なお、各様式・段階の名称・年代観は藤澤良祐氏による瀬戸・美濃製品の見解に従っている。

（１）各地点の時代的傾向

各地点の国産陶器（瀬戸・美濃、志戸呂、初山）の出土量を時期ごとに分けグラフ化して比較すると、出土量が目に見えて増加し始める時期が３つのグループに分かれることがわかる（表 1）。

ひとつは静岡地簡裁地点・雙葉学園地点・駿府城西ノ丸地点で、静岡地簡裁地点は先行して 1200 年代末（古瀬戸中期様式Ⅰ期）から増加傾向があるものの、いずれも 1346 年～1386 年（同中期様式Ⅳ期～後期様式Ⅰ期）頃に著しい増加が捉えられる（グループＡ）。このグループではその後 1445 年～1529 年（同後期様式Ⅳ期古～大窯１段階）にかけて出土量が著しく増加していく傾向があり、この時期は次に挙げるグループＢと重複する。1530 年（大窯２段階の始期）以降は減少傾向にあるが、一定量が搬入される地点（静岡地簡裁地点・雙葉学園地点）と、次第に搬入量が減少していく地点（駿府城西ノ丸地点）がある。

二つ目は静大付属小地点・青葉小学校地点・美術博物館地点・大成中・高校地点で、1445 年～1479 年（同後期様式Ⅳ期古～Ⅳ期新）頃に著しい増加が捉えられるものである（グループＢ）。この中には 1480 年～1529 年（大窯１段階）頃にかけて徐々に増加しピークを迎える地点（静大

付属小地点・青葉小学校地点）と、やや遅れて 1530 年～1559 年（大窯２段階）頃にピークを迎える地点（大成中・高校地点）がある。

一方で美術博物館地点は当初から最大量となる点、同等量の利用が継続する点で他の３地点とは異なる。ピーク後はやや減じながらも一定量が搬入され続ける地点（静大付属小地点）と、次第に減少していく地点（青葉小学校地点・美術博物館地点・大成中・高校地点）がある。

三つ目は県庁別館地点で、1591 年～1610 年（大窯４段階）頃に突如として増加するものである（グループＣ）。

なお、グループＡの出土量のピークはグループＢのピークと大窯１段階で重複するが、同期間内の搬入量は静岡地簡裁地点 55.24 破片/100 ㎡に対し静大付属小地点 25.04 破片/100 ㎡と２倍以上の開きがある。このことは、地域内に大量消費が図られる場所とそうでない場所が併存していたことを示す。

また、国産陶器が継続的に搬入され始める当初の時期は、グループＡが鎌倉時代から、グループＢのうち大成中・高校地点を除く地点が静岡地簡裁地点と同時期の 1200 年代末頃（古瀬戸中期様式Ⅰ期）から、グループＢのうち大成中・高校地点とグループＣが 1366 年～1386 年（同後期様式Ⅰ期）頃からとなり、グループＢ・Ｃはグループ Ａの動向に連動しているように見える。このように、検討範囲で把握できる駿府の街は、当初駿府城跡の南西域付近を中心としていたものが、100 年程度の間にいくつかの段階を経てその外縁に拡張していったものと考えられる。

表１　国産陶器の時期別出土量（100 ㎡あたり推定値）

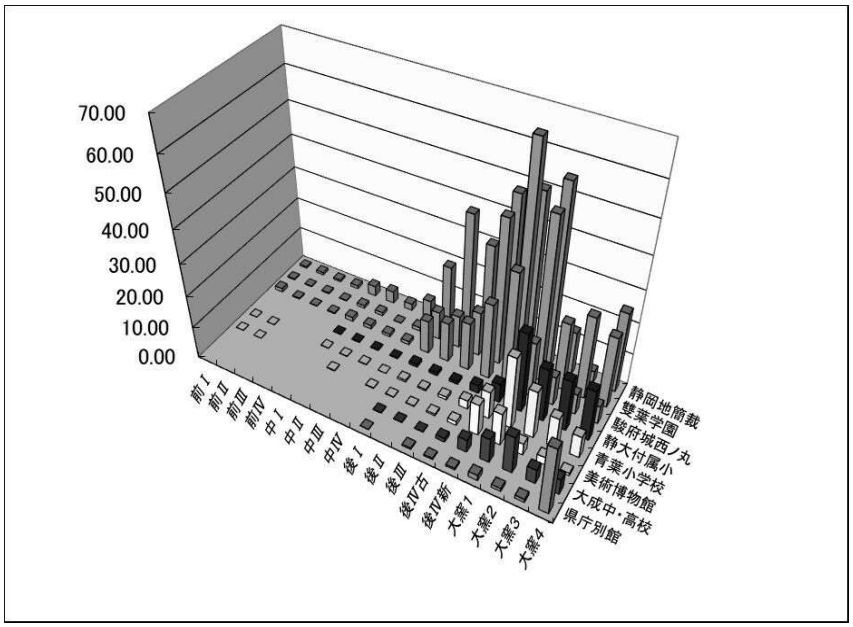
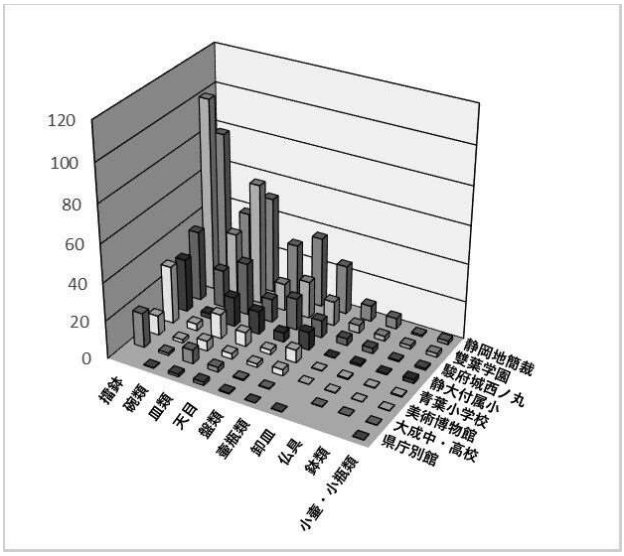


表２　国産陶器の器種別出土量（100 ㎡あたり推定値）



（２）各地点の器種別傾向

前述のグループＡに属する３地点については、雙葉学園地点の擂鉢、皿類の比率がやや多いものの、およそ近似した構成比を示している。したがって、各地点は量の差こそあるものの、居住者が所有する器種の構成は同等であったことが窺える（表２）。

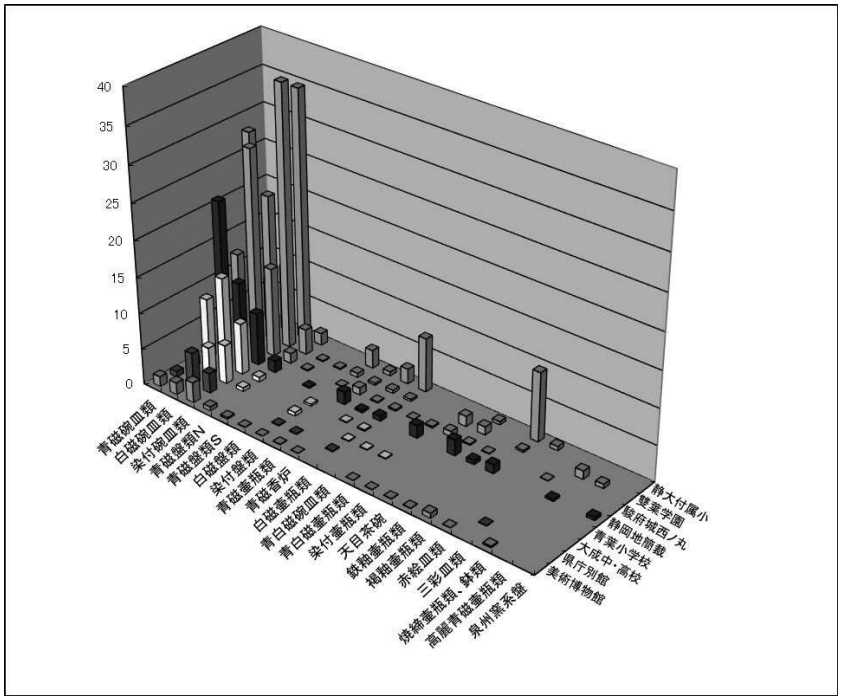
一方、グループＢ・Ｃについては、グループＡに比べ碗類と盤類が著しく少ない傾向にある。

また、グループＣでは、グループＡ・Ｂが数量の差はあるものの多くの器種を備えているのに

対し、調理具である擂鉢や鉢類、仏具を欠いていることから、生活感がより薄く感じられる。

生活や風習が同様であれば、各地点の器種構成は近似したものになると考えられるが、このような差異が窺われることは、近接する土地に身分や生業が異なる者が居住していたことの現れであろう。

表３　貿易陶磁の器種別出土量（100 ㎡あたり推定値）



２　貿易陶磁の出土傾向

青磁や白磁、染付など当時日本列島で生産ができない磁器質や天目茶碗、壺類など特異な陶器質の焼物が大陸から輸入され、使用されている。当時の駿府でも、入手、使用されたものが、各地点から出土している。

なお、これら貿易陶磁は、国産陶器に比べ高価で珍重されるため、長期にわたる使用や人づてに引き継がれる伝世が生じやすく、生産年代が消費地に搬入された時期に相応しない可能性があることから、時代的な傾向の分析は施さないこととする。

（１）各地点の器種別傾向

いずれの地点でも高い比率で出土する青磁・白磁・染付の碗皿類は、多くは広く行き渡った普段使いのものと察せられる。染付皿はいずれの地点でも同一サイズ・同一柄のものが多く出土することから、複数枚を揃として使用していた可能性を感じさせる。これらに比べ、壺類や盤類などは著しく出土量が少なくなる上、青磁香炉、天目茶碗、褐釉壺甕類などにいたると、出土しない地点も目立ってくる（表３）。

先にグループＡとした地点は、青磁・白磁・染付の碗皿類のほか、数は少ないながらも比較的多くの器種がまんべんなく出土する傾向で共通し、静岡地簡裁地点では青磁・青白磁・褐釉の壺瓶類と天目茶碗、駿府城西ノ丸地点では青磁・染付壺瓶類、雙葉学園地点では染付壺瓶類、焼締壺瓶類・鉢類、天目茶碗の出土がやや多くなる。

グループＢとした地点のうち、青葉小学校地点と大成中・高校地点では碗皿類以外の器種が出土する頻度は低い。一方、少ないながらも多くの器種が出土する美術博物館地点の傾向は、グループＡのありかたに近似している。静大付属小地点では染付碗皿類が著しく多く、碗皿類以外の器種も染付盤類、青磁香炉、白磁・褐釉壺瓶類が卓越している。このようなあり方は他地点にみられないことから、土地の利用方法も他と異なったものであったと推測できる。

グループＣでは、碗皿類以外の出土する器種がごく限られたものになる。グループＢのうち、青葉小学校地点や大成中・高校地点のあり方に近似している。

（２）「威信財」の分布

室町将軍の同朋衆が記した『君台観左右帳記』は将軍家の座敷飾りの流儀を記した書物で、ここには床飾りに用いられる掛物の等級と床飾りの方法である「餝次第」が記されている。餝次第は更に押板（床の間の祖形）の場合と書院の違い棚の場合との二部構成となり、前者では壁面などに掛けられる絵画類とともに、仏式荘厳の器物である花瓶・香炉・燭台の三種（三具足又は五具足）による飾りつけが示される。三具足の場合は、向かって右から燭台・香炉・花瓶の順番で床板上に並べられ、背後には三副あるいは五副で一対の掛物が下げられるのがしきたりとされる。五具足の場合は、香炉を中心に据えて左右に花瓶と燭台を対で置くことになる。後者の違い棚の場合には、唐物茶入れとともに建盞（建窯産の天目茶碗）が６個積み重ねられる様子が記されている。

先に見てきた青磁・白磁・染付の碗皿類以外の器種は、この地域で室町将軍の流儀を模した床の飾り付けに用いられたと考えられるもので、所有者の社会的な地位をあらわす「威信財」に位置づけられる。出土傾向から推測すると、多種の「威信財」をもつグループＡの各地点とグループＢのうち美術博物館地点、限られた器種の「威信財」を多くもつ静大付属小地点には、他よりも地位の高い者の屋敷や施設が設けられていたと推測することができる。

３　かわらけの出土傾向

かわらけとは素焼きの坏～皿状の器であり、駿府城内遺跡からはロクロを用いて成形されたものとロクロを使わず手でこねて整形したものが出土するが、前者が圧倒的に多い。かわらけは灯りをともすために油を溜める燈明皿に使用される場合もあるがそれはごく少量で、大多数は使用の痕跡が残らない方法で大量に使用・廃棄される。

これらかわらけの主用途は武家儀礼に起源をもつ会食用のうつわといわれる。御成記やさまざまな料理書の記載からは、料理等を盛ったかわらけをへぎ板に縁を付けた折敷と呼ばれる盆に載せて個人宛に配膳し、使い終えた後に折敷ごと下げ廃棄するというサイクルが窺える。実際に静岡地簡裁地点で発見された大溝の中からも、折敷や箸などとともに投棄されていることが確認され、他の複数地点でも掘った穴へひとまとめにして廃棄する様子が把握されている。

弘治２～３年（1556～1557）に駿府に逗留した山科言継は弘治３年２月 22 日、浅間社廿日会祭の桟敷で浅間社の禰宜らが持ってきた「樽土器物」で酒を飲んでいることが記録される（『言継卿記』）。ここに記された「土器物」もかわらけであると認められる。

（１）各地点の出土傾向

かわらけの各地点の出土数量には著しい差がある（表４）。静岡地簡裁地点は限られた調査区の中に複数の一括廃棄が認められたことから極端な出土量を示しているが、1,000 破片/100 ㎡程度の出土量が頻繁に認められる。静大付属小地点からの出土はごく少ない。この傾向は、先に述べた多種多様

表４　かわらけの出土量（100 ㎡あたり）

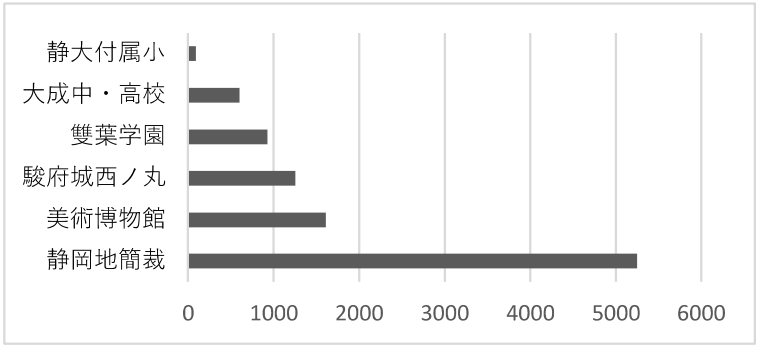
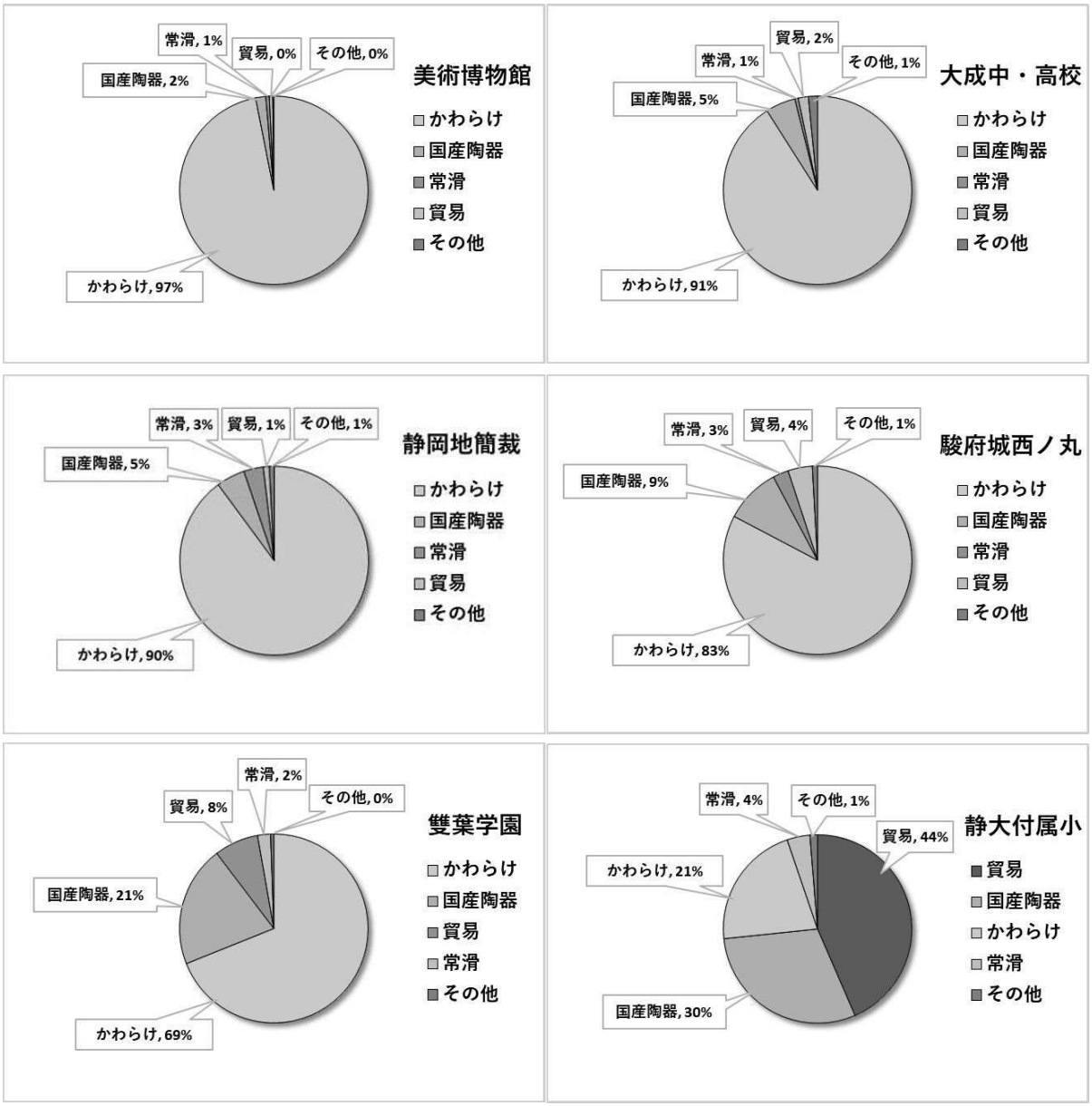


表５　総破片数に見るかわらけの比率



な貿易陶磁の威信財の出土傾向と連動しているように見える。

（２）総破片数に見るかわらけの比率

総破片数に占めるかわらけの割合も、地点によって異なったありかたを示している（表５）。

かわらけが総破片数の 90%以上を占める地点の中でもひときわ高割合を示すのは、美術博物館地点である。少量の国産陶器や貯蔵形態である堅牢な壷や甕などで構成される常滑製品、微量の貿易陶磁等がある以外はほぼすべてがかわらけといってよい。かわらけの比率が 90%付近にある大成中・高校地点と静岡地簡裁地点は常滑製品の比率が若干異なるのみで、ほぼ同比率の構成となる。駿府城西ノ丸地点は、前３地点に比べれば国産陶器と貿易陶磁の割合がやや高くなってかわらけの割合を低下させているものの、83%と高率を示す。これらかわらけを高い割合で消費する地点は、かわらけを用いた儀礼が高頻度で行われていたことを示している。

雙葉学園地点ではかわらけの比率が前４地点に比べてさらに低くなる。やはりここでもかわら

けを用いた儀礼が一定程度行われていたことを示しているが、国産陶器や貿易陶磁の割合が比較的高いことから、これらを利用した食膳もあつらえられていたことを感じさせる。

一方で、静大付属小地点のかわらけの比率は21%と各地点間で最も低い。ここでは貿易陶磁が44%、次いで国産陶器が30%といずれもかわらけより多く使用されている。このことから、この地点はかわらけを用いた儀礼が行われる頻度が低く、国産陶器や貿易陶磁を日常の飲食に使用していたとみられる。

なお、いずれの地点でも常滑製品は１～４％と低率であることは、これら地点には職業上の必要性から液体の貯蔵を行う常滑製の大甕を複数据え付けた施設（例えば油や紺屋の染汁など）が含まれていないことを示唆している。

まとめ

これまでみてきた駿府城内遺跡の陶磁器、土器の数量的な特徴をまとめると表６のとおりである。南北朝時代から戦国時代にかけて複数の段階を経て西から東側へ拡充されていった駿府は、武家地、寺社地などが整然と配置されたものではなく、地位や職掌に基づく格差がある者同士が隣り合う屋敷地に居住する、モザイク状に混在したものであったと考えられる。

今回の作業を通じて、陶磁器や土器の出土傾向を明らかにしていくことが、今川氏が活躍していた頃の駿府の風景を復元する有効な手段のひとつであることが確認できた。検討に漏れた地点についても同様な分析を粘り強く進めていくことが、今後の中世駿府の復元や今川研究の進展に必要であると考える。

表６　各地点の陶磁器、土器からみた特徴

地点	開始時期	国産陶器	貿易陶磁	かわらけ	推測される機能
静岡地簡裁	13世紀末～14世紀後半	比較的多くの器種が出土	比較的多くの器種が出土	大量	上流武家の屋敷地
雙葉学園	14世紀後半	比較的多くの器種が出土	比較的多くの器種が出土	多量	上流武家又は有力商人・公家の屋敷地
駿府城西ノ丸	14世紀後半	比較的多くの器種が出土	比較的多くの器種が出土	大量	上流～中流武家の屋敷地
静大付属小	15世紀後半	碗類・盤類が低頻度	碗皿類以外は特定器種が卓越	ごく少量	寺社か
青葉小学校	15世紀後半	碗類・盤類が低頻度	碗皿類以外は低頻度	―	中流者の屋敷地
美術博物館	15世紀後半	碗類・盤類が低頻度	比較的多くの器種が出土	大量	上流武家の屋敷地（奥向き）
大成中・高校	15世紀後半	碗類・盤類が低頻度	碗皿類以外は低頻度	少量	中流武家の屋敷地
県庁別館	16世紀末？	全般的に低頻度	碗皿類以外は低頻度	―	空閑地か中流者の屋敷地

＊本稿作成には各地点の発掘調査報告書を参考にしている。紙面の都合で詳述は省略する。

＜報告②＞

中世駿府の池状遺構

山本宏司

はじめに

静岡市における中世期今川氏関連の発掘調査は、駿府城公園内の旧駿府会館跡地において本格的な調査が行われ、その成果が注目された。以後、駿府城公園の再整備事業や周辺の開発による発掘調査によって、多くの発見がなされている。今回のシンポジウムに際し、駿府城公園再整備事業の第４工区での発掘調査によって確認された中世の遺構について再掲し、周辺の関連遺構とも比較検討していきたいと考えている。

駿府城公園再整備第４工区の発掘調査（第２図、第３図）

駿府城公園の再整備事業に伴い駿府城公園再整備第４工区発掘調査が平成 17 年度に行われた。本地点は、近世駿府城の二ノ丸南西部分にあたり、西ノ丸と呼ばれていた地区と南東角の坤櫓部分である。近世の遺構では、坤櫓の櫓台石垣や二ノ丸御門の石垣根石等が確認され調査されている。

中世期の主な検出遺構としては、大きな区画溝と庭園関連の遺構として池状遺構が検出されている。区画溝はＡ地区では南北方向に SD－09、10 と SD－06、07 が確認されている。SD－09 は幅約３ｍで深さが最深部で約 1.8ｍの遺構で、ＳＤ－10 側に約 60 ㎝の段差がありＳＤ－10 側に傾斜している。ＳＤ－10 も上部の攪乱等が存在するが、同規模で続いていると思われる。ＳＤ－07 は幅約２ｍ、深さ約 1.7ｍとＳＤ－09 と同規模で、ＳＤ－09 の終点で西側に約７ｍの間隔を置いて始まり、平行に南側調査区外へと続いている。北側にはＳＤ－06 が接続している。長さは約 24.5ｍに及び最大幅は約 1.5ｍ、深さは約 90 ㎝である。

さらに、１トレンチ内ではＳＤ－09 から溝の中心で東へ約 60ｍの位置にＳＤ－09 とほぼ平行する溝ＳＤ－01 が検出されている。ＳＤ－01 は幅が約 3.5ｍ～４ｍで深さ約 1.6ｍ～1.9ｍの規模で、近世駿府城本丸堀の折れ部分から南へ約 28ｍ確認されている。この溝の始点は、ＳＤ－09 とＳＤ－10 の喰い違った視点からほぼ直行している。

池状遺構は、A 地区 11 トレンチの西側で検出された SX－02 である。確認された規模は東西 18ｍ、南北 12ｍであるが遺構は西～北西側に続くため全体の規模は不明である。池状遺構は確認面から約 40 ㎝の深さで、周囲は緩やかに立ち上がっている。西側は 10 ㎝～50 ㎝（主体は 20 ㎝前後）の川原石が敷き詰められており、さらに調査区外へ続いている。東側へは溝状の形状でＳＤ－06 方向へ伸びている。敷石の北側には 1.2ｍ×0.9ｍ、南西側には 0.9ｍ×0.6ｍ、南中央付近に 0.9ｍ×0.7ｍの大石が配置されており景石と考えられる。敷石南東側には 1.7ｍ×1.2ｍの落ち込みがあり、景石の据え跡と思われる。敷石中にも石が存在しない部分があり、景石が配置されていた可能性が考えられる。

周辺で発掘された庭園関連遺構について

旧駿府会館跡地の調査（第４図）　昭和 57 年の静岡県教育委員会によって駿府城公園内の旧駿府会館跡地周辺の発掘調査により中世期の池状遺構、湧水施設、暗渠排水、井戸等の遺構が検

出され注目を集めた。

池状遺構は東西約 20m、南北約 19mで深さは約 1.3mである。この池状遺構南東側に東西約 3.3m、南北約 3.9m、深さ約１m程度の隅丸方形の土坑が掘られ、その中に木桶と板組の井戸状湧水施設が検出された。この湧水施設からに西へのびる小溝を経て 3 号大溝内に石組みの暗渠排水路も確認されており庭園の一端を担っていた施設と考えられる。

城内中学校地点の調査（第５図）　昭和 62 年に静岡市教育委員会によって城内中学校の現在の校舎部分の調査が行われ大型の土坑を検出している。東西方向で約７m、南北方向は約 3.5m程で二つの土坑が連結したような不整形であり、調査区外へ続くため全容は不明である。深さは約１mである。土坑の大きさや覆土の状況から常時帯水が予想され、縁辺部で川原石が出土していることなどから庭園に伴う池の可能性が報告されている。報告書でも触れられているが、他の池状遺構と比較すると一回り小さく、立ち上がりも比較的急に思えるが、南側の調査区外の状況が調査されていないために確定できない。

駿府城天守台地区の調査（写真１）　静岡市によって平成 28 年から行われた近世駿府城の天守台部分の発掘調査により令和元年に中世期の池状遺構と断面がＶ字状の溝状遺構（薬研堀）が検出され、溝の規模は幅約３m、深さ約 1.7mである。

池状遺構は窪地状を呈しているが、トレンチ内での確認のためその全容は確認されていないが、全体としては 20m程の規模になるものと考えられている。

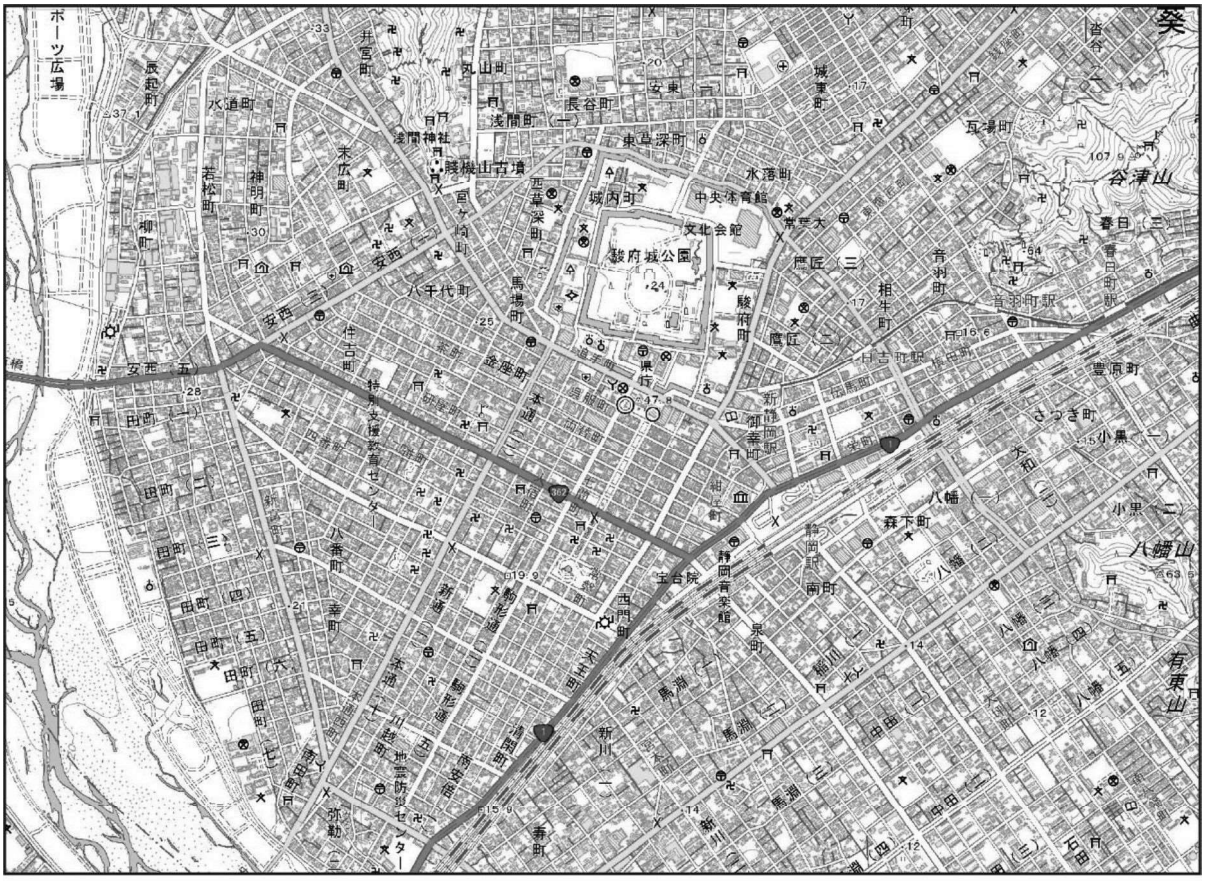
おわりに

静岡市は平野の西側を流れる安倍川の扇状地として形成されている。中世の静岡もこの扇状地の扇頂部を中心とした地域に今川館を中心とした街が形成されていると考えられている。これらの埋没地形と街並みの発展過程については小泉氏の論考（小泉祐紀 2021）が詳しい。今回は、最近の駿府城周辺の発掘調査により確認された庭園に伴うと考えられる池状遺構等を紹介してきたが、小泉氏作成の中世の駿府図（第６図）によれば今回紹介した庭園に関連したと思われる池状遺構は復元標高 20m付近から 23m 付近にかけての地域取分け標高 22m 前後に集中している。これは駿府城内の調査が圧倒的に多いことも要因であると考えるが、数は少ないが駿府城域以外の調査状況を比較するとやはり遺構や遺物の様相から明らかにこの地域に中心が存在していたのではないかと思われる。さらに広がりを確認するためには北側の現葵小学校地点の発掘資料の整理が進むことを期待したい。

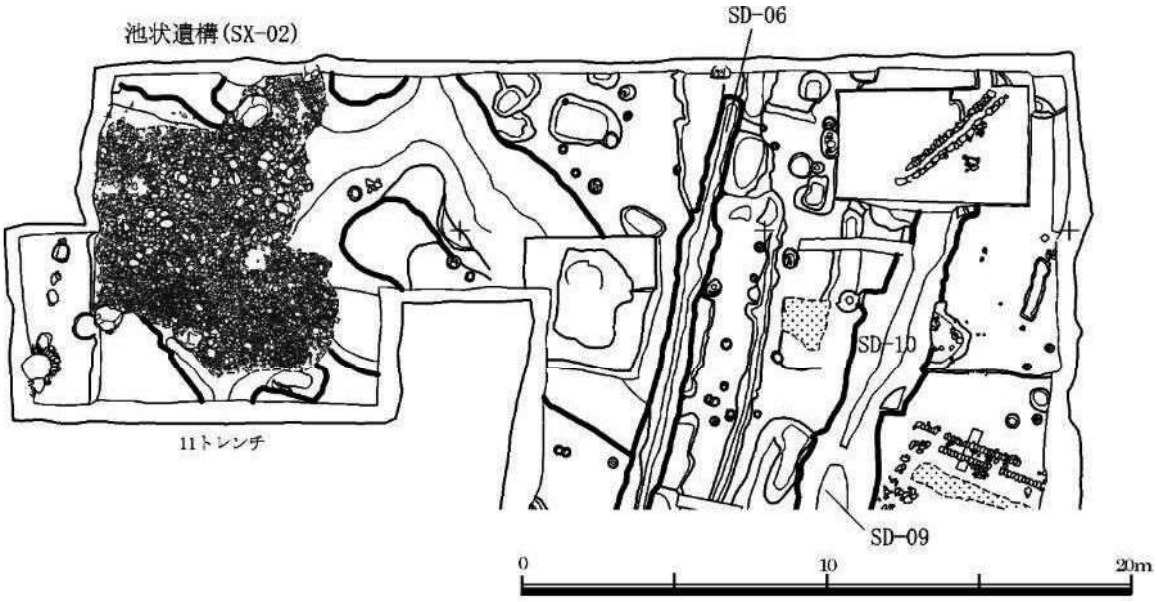
中世今川氏館の存在はこれまで論議されている。調査が進んでいる近世駿府城内でも堀の造成により大規模の改変がなされており残存状況が悪い部分も多いが、今後は文献ですでに確認されている屋敷等の状況を合わせて包括的に研究を進めることが必要であると思われる。

参考引用文献

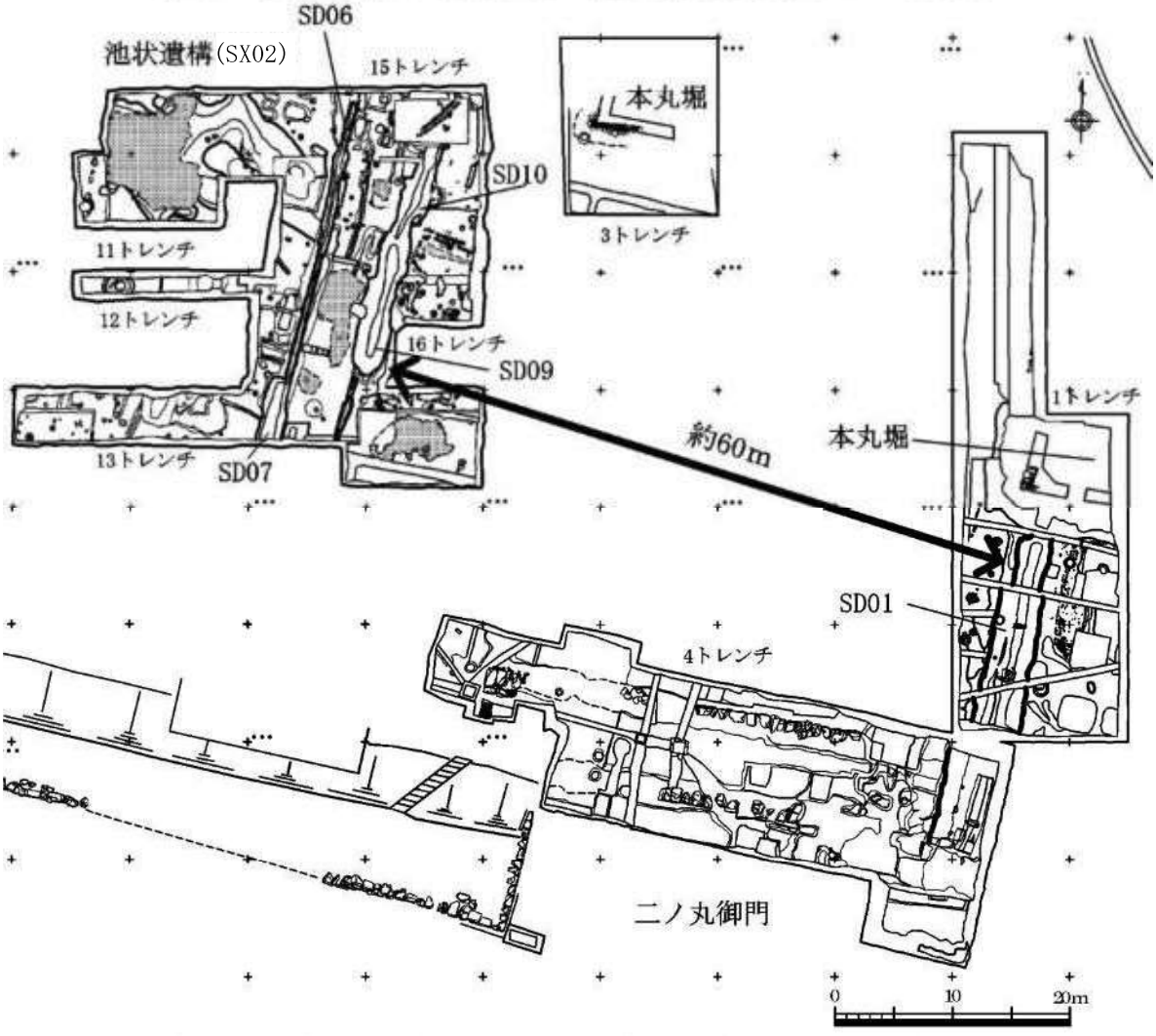
静岡県教育委員会 1983 『駿府城跡内埋蔵文化財発掘調査報告』
静岡市教育委員会 2010 『駿府城跡Ⅸ 駿府公園再整備第４工区発掘調査報告書（遺構編）』
静岡市 2020 『駿府城跡天守台まるごと発掘④ 令和元年度発掘調査概要』
静岡市教育委員会 2021 『駿府城跡三ノ丸　城内中学校地点発掘調査報告書』
小泉祐紀 2021 「発掘調査と埋没地形からみた中世以前の駿府」『地域と考古学Ⅱ 向坂鋼二先生米寿記念論集』



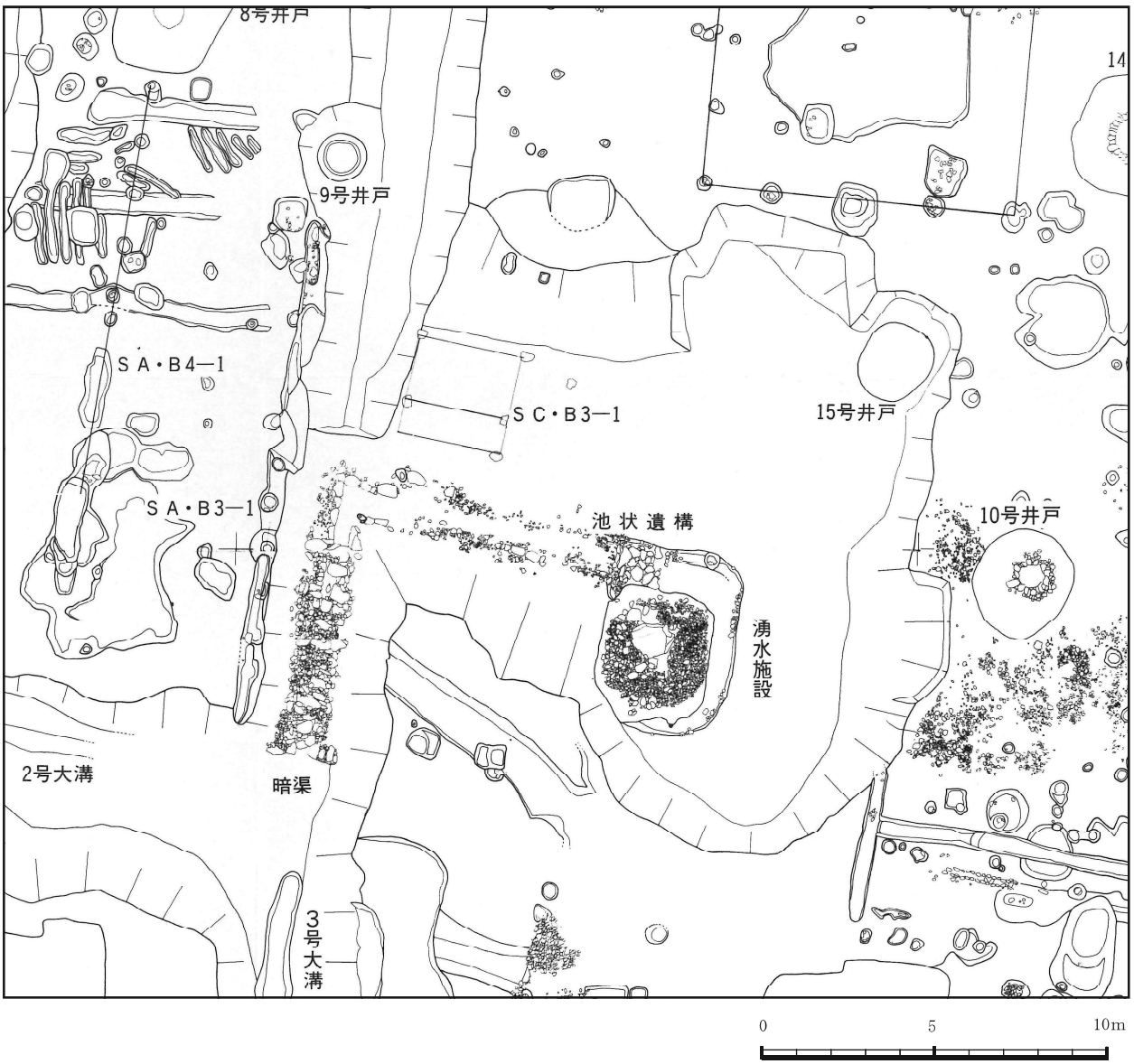
第１図　駿府城周辺地形図（１/30000）



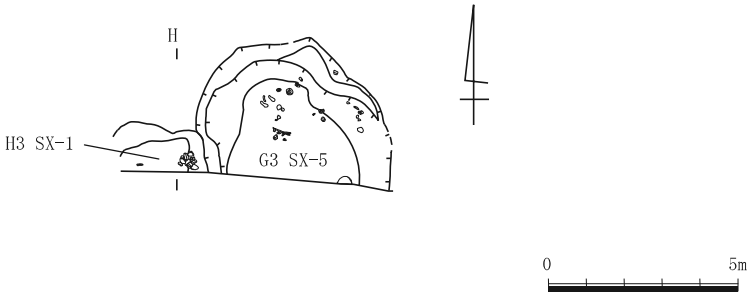
第2図　平成17年調査の池状遺構　(静岡市教育委員会 2010 再構成)



第3図　平成17年調査の中世遺構　(静岡市教育委員会 2010 加筆)



第４図　昭和 57 年調査の池状遺構（静岡県教育委員会 1983 より 転載）



第５図　昭和 62 年　調査の池状遺構　(1/200、静岡市教育委員会2021より転載)

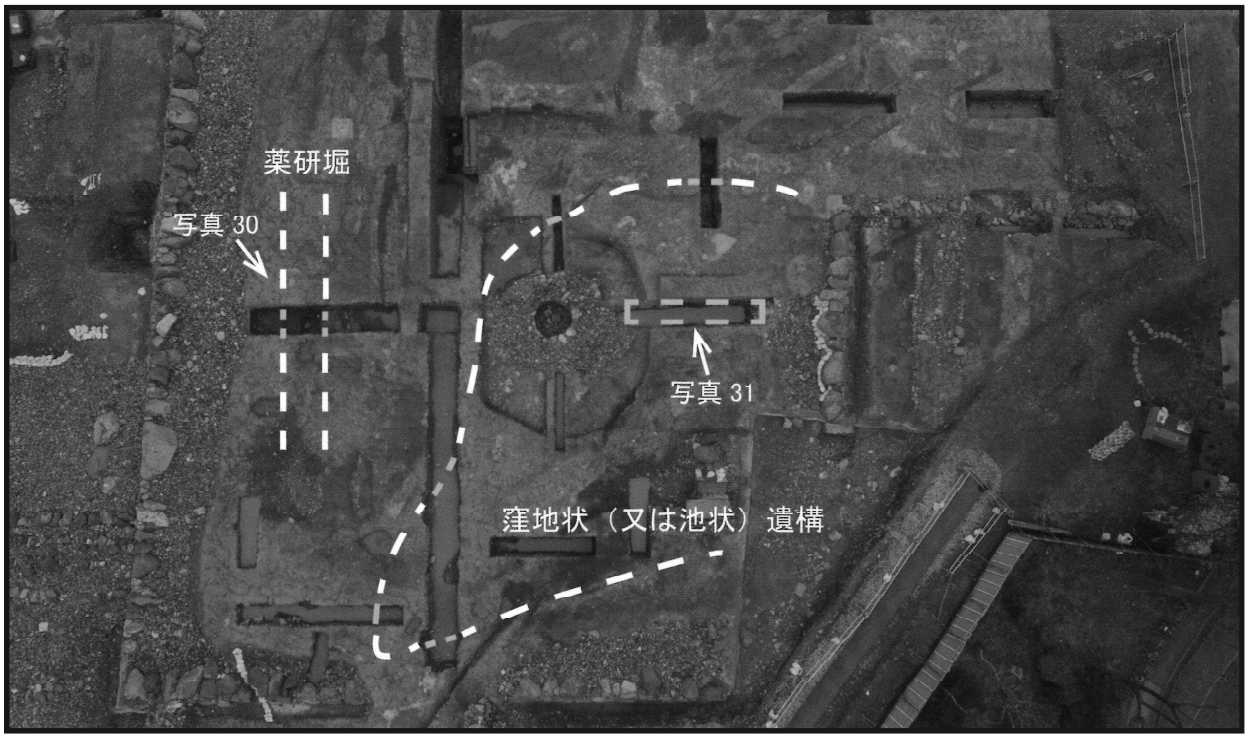
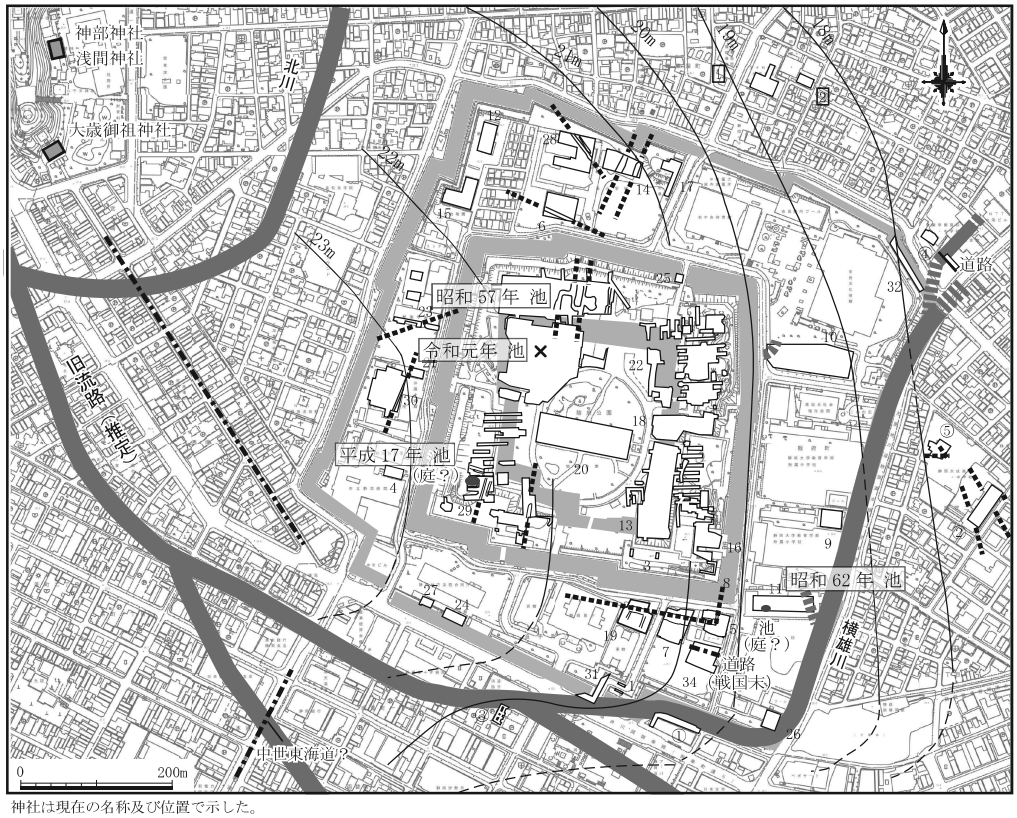


写真１　令和元年度調査の池状遺構（静岡市 2020 年より転載）



神社は現在の名称及び位置で示した。

第 6 図　中世の駿府（小泉 2021 より転載加筆）

＜補足資料編①＞

関連年表

年	西暦	できごと
建武 4 年	1337	足利尊氏、遠江守護今川範国に駿河国葉梨荘などを与える
建武 5 年	1338	足利尊氏、征夷大将軍となる。（室町幕府開幕） 今川範国、駿河守護となる
観応 2 年	1351	薩埵峠の戦いで足利尊氏、直義両軍が戦う
文和元年	1352	今川範氏が 2 月に遠江守護、翌年に駿河守護となる
文和 4 年	1355	範氏、駿河国浅間社造営のため徳政を行う
嘉慶 2 年	1388	足利義満、富士山見物のため駿河国に来る
明徳 3 年	1392	南北朝が合一される
応永 7 年	1400	足利義満、今川泰範を駿河・遠江守護に任じる
応永 30 年	1423	幕府、駿河守護今川範政らに鎌倉公方足利持氏追討を命じる
永享元年	1429	足利義教、駿河国軍勢の関東への発向を命じる
永享 4 年	1432	足利義教、富士山見物のため駿河国に来る
永享 10 年	1438	幕府、今川範忠に関東管領上杉憲実の加勢を命じる
永享 11 年	1439	今川範忠ら、鎌倉公方足利持氏を攻める（永享の乱）
永享 12 年	1440	幕府、今川範忠らに下総の結城氏討伐を命じる
寛正 2 年	1461	幕府、今川義忠に足利政知を援助させる
文明 7 年	1475	今川義忠、遠江国府を攻め、ついで勝間田氏を破る
文明 8 年	1476	今川義忠、遠江国塩買坂で討死する
長享 1 年	1487	伊勢宗瑞（北条早雲）、今川館の小鹿範満を自害させ、氏親が今川家当主となる
明応 3 年	1494	今川氏親、遠江へ侵攻を開始する
文亀 1 年	1501	伊勢宗瑞率いる今川軍が遠江に侵攻し斯波軍と戦う
永正 1 年	1504	今川氏親、伊勢宗瑞が関東へ出陣する
永正 3 年	1506	伊勢宗瑞率いる今川軍が三河国に出陣し今橋城を落とす
大永 5 年	1526	今川氏親、今川仮名目録条目 33 カ条を定める。6 月氏親没
天文 4 年	1535	今川氏輝、北条氏綱の加勢を受けて、武田信虎と戦う
天文 5 年	1536	栴岑承芳（今川義元）が玄広恵探に勝利し当主となる（花蔵の乱）
天文 6 年	1537	河東一乱。富士川以東に侵攻した北条氏と今川氏が戦う
天文 11 年	1542	今川義元、三河国小豆坂で織田信秀と戦う
天文 14 年	1545	第 2 次河東一乱。今川・北条の戦いが激化するも武田信玄が仲介し和睦する
天文 17 年	1548	義元、三河国小長坂で織田信秀と戦う（第 2 次小豆坂合戦）
天文 18 年	1549	竹千代（徳川家康）、駿府に到着する
天文 22 年	1553	義元、今川仮名目録追加条目 21 カ条を定める

年	西暦	できごと
天文 23 年	1554	義元の嫡男氏真に、北条氏康の娘早川殿が嫁ぐ（甲相駿三国同盟成立）
永禄 3 年	1560	今川義元、桶狭間の戦いで討死する
永禄 7 年	1564	今川氏真、遠州の混乱（遠州忩劇・そうげき）平定のため遠州国人を攻める
永禄 11 年	1568	武田信玄、駿河国に侵攻し、氏真、懸川城に逃れる 徳川家康、遠江国に侵攻する
永禄 12 年	1569	氏真、懸川城を開城する。（戦国大名今川氏滅亡）
天正 10 年	1582	家康、甲斐攻略。武田勝頼自害（武田氏滅亡） 家康、信長から駿河一国を与えられる 本能寺の変。信長が明智光秀に殺される
天正 12 年	1584	小牧・長久手の戦いで、家康と秀吉が対峙する。
天正 13 年	1585	家康、駿府城の修築に着手。秀吉が関白になる。
天正 14 年	1586	家康、浜松城から駿府城に移る
天正 16 年	1588	駿府城天守の普請
天正 18 年	1590	家康、関東移封を命じられ江戸入城 豊臣家臣の中村一氏が駿府城入城
慶長 5 年	1600	関ケ原合戦
慶長 8 年	1603	家康、征夷大将軍になる（江戸幕府開幕）
慶長 6 年	1601	内藤信成、駿府城入城
慶長 12 年	1607	家康、駿府城に移り住む
慶長 15 年	1610	駿府城天守完成

参考文献

大石泰史編 2017『今川氏年表 氏親 氏輝 義元 氏真』高志書院
小和田哲男 2007『駿府の大御所徳川家康』静岡新聞社
静岡市役所 1979『静岡市史ー近世』
静岡県歴史教育研究会 2003『静岡県歴史年表』静岡新聞社
長倉智恵雄 1995『戦国大名駿河今川氏の研究』東京堂出版

＜補足資料②＞

今川館・今川家臣屋敷・駿府関係史料表

静岡市文化振興財団　廣田浩治・鈴木将典

駿府の今川氏の館関係史料　（出典刊本…県史7：『静岡県史資料編』の巻号と史料番号、遺文：『戦国遺文今川氏編』　以下同）

No.	和暦	西暦	月日	史料名	事項名	内容	文書・記録名	出典刊本
1	大永6年	1526	4.4	今川仮名目録	三浦二郎左衛門尉・朝比奈又太郎の出仕の座敷 勧進猿楽・田楽・曲舞の桟敷は闔次第	今川館での家臣の出仕の座席の秩序 勧進猿楽・田楽・曲舞の桟敷は闔で決定	今川仮名目録	県史7-916 遺文397
2	享禄3年	1530	7.7	宗長手記	氏輝亭	連歌師宗長との和歌会	宗長手記	県史7-1081
3	天文1年	1532	正月	為和集	今川亭	公家歌人冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1141
4	天文2年	1533	1.13	為和集	今川五郎氏輝亭	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1197
5	天文5年	1536	8.15	為和集	今川五郎義元亭	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1386
6	天文8年	1539	1.1	今川義元書状	龍王丸（氏真）守衆の人選	幼少の今川氏真の守衆（幼少守立）	菊池立元氏所蔵文書	県史7-1484 遺文620
7	天文8年	1539	1.13	為和集	今川治部大輔義元亭	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1486
8	天文15年	1546	3.24	為和集	太守（義元）の北の亭	今川義元の北の亭で冷泉為和と和歌会	為和集	県史7-1785
9	天文19年	1550	1.26	高白斎記	数寄屋ノ座にて御茶・御酒	今川館の数寄屋の座	高白斎記	県史7-1968
10	天文19年	1550	12.11	今川家諸宗礼式写	御屋形様（今川氏）と諸宗の対面御礼の儀式 雪斎の筆	年始の礼、御対面の順序（新宮・惣社神主、惣持院別当、御祈願所寺々、府中府外先例）	臨済寺文書	県史7-2026 遺文990
11	天文20年	1551	12.11	高白斎記	駿府の御曹子様（今川氏真）の御屋移り	今川氏真の屋敷移転	高白斎記	県史7-2085
12	弘治2年	1556	10.2、10	言継卿記	大方の邸宅の庭園、座敷・持仏堂	寿桂尼亭の庭園・座敷・持仏堂を山科言継が見物	言継卿記	史料纂集
13	弘治2年	1556	11.15	言継卿記	大方の邸で風呂のもてなし	言継が寿桂尼亭を訪問	言継卿記	史料纂集
14	弘治2年	1556	11.19	言継卿記	義元亭の門・門外 義元亭で山科言継や今川家臣が和歌会	言継が義元亭を訪問	言継卿記	史料纂集
15	弘治2年	1556	11.20	言継卿記	氏真亭の中門外・庭・取次 今川氏真亭で言継や今川家臣が酒宴	言継が氏真亭を訪問	言継卿記	史料纂集
16	弘治2年	1556	11.21	言継卿記	寿桂尼亭で言継と義元・今川家臣が会食	言継が寿桂尼亭を訪問	言継卿記	史料纂集
17	弘治3年	1557	1.5	言継卿記	言継と今川家臣が正月に義元・氏真と対面	言継が義元亭を訪問	言継卿記	史料纂集
18	弘治3年	1557	1.12	言継卿記	遠江の朝比奈備中守泰・左京亮父子が今川館に出仕		言継卿記	史料纂集
19	弘治3年	1557	1.13	言継卿記	言継と今川家臣が氏真の和歌会始に出席	正月の和歌会始・会食・音曲	言継卿記	史料纂集
20	弘治3年	1557	2.5	言継卿記	寿桂尼亭で言継と義元・今川家臣が会食	寿桂尼が言継を招待　言継母（御黒木）も同席	言継卿記	史料纂集
21	弘治3年	1557	2.25	言継卿記	言継・今川家臣が氏真亭で和歌会	32人が和歌会に出席、夕食	言継卿記	史料纂集
22	元亀4年	1573	11.2	武田家朱印状	義元隠居屋敷		岡部家文書	県史8-2547

駿府の今川氏権力機構に関する家臣の史料

No.	和暦	西暦	月日	史料名	事項名	内容	文書・記録名	出典刊本
23	（永正）		7.9	福嶋助昌書状	駿府に申し越し、奉行衆へ託事 駿府に文書（文箱・起請文）を提出	駿府の奉行衆が訴訟を取り次ぐ	大福寺文書	県史7-456 遺文201
24	永正12年	1515	11.28	善勝書状写	左衛門殿が御奏者	福嶋助春が氏親の判物の奏者	大福寺文書	遺文286
25	大永5年	1525	8.28	朝比奈時茂・福嶋盛廣連署奉書	氏親の仰せを受けた奉書		頭陀寺文書	県史7-873 遺文384

26	大永6年	1526	6.12	今川氏親朱印状	岡部大和守が奏者	岡部大和守が奏者として取り次ぐ	駿府皮革職人文書	県史7-920 遺文399
27	天文5年	1535	2.17	朝比奈親徳・親貞連署奉書	氏輝の仰せを受けた奉書		尾上文書	県史7-1365 遺文539
28	天文12年	1543	5.20	今川義元判物写	在城の衆が年来の番・普請を無沙汰して、在府して無用を訴訟を起こすのを停止	遠江の在城衆に対する指示	土佐国蠹簡集	県史7-1627 遺文709
29	天文18年	1549	8.7	今川義元朱印状	清談奉行光盛・同奉行元秋が発給	浅間社流鏑馬役をめぐる社家と百姓の相論	村岡文書	県史7-1932 遺文901
30	天文18年	1549	8.11	駿府浅間社社役目録	岡部左京進（親綱）が奏者	奏者の岡部は御祓の代物下行の取次	村岡文書	県史7-1933 遺文902
31	天文21年	1552	11.12	今川義元判物	たとえ本百姓が参府しても、直訴は許容しない	百姓の駿府参上と直訴を禁止	天野文書	県史7-2161 遺文1117
32	天文22年	1553		今川家訴訟条目	毎月評定六か日　宿老　奉行人　奉行の宿所		今川家訴訟条目	県史7-2173 遺文1131
33	弘治3年	1557	7.12	由比光綱・朝比奈親綱連署状	松平和泉守（親乗）が長々と在府、「彼家中申事候哉」	三河松平氏の在駿府	本光寺常磐歴史資料館所蔵田島文書	県史7-2571 遺文1341
34	弘治3年	1557	8.9	松平親乗書状	三河吉田にいる竹千代を駿府に呼ぶ 駿府での訴訟、そのための礼	三河松平氏の在駿府、年少者を呼び寄せる	本光寺常磐歴史資料館所蔵田島文書	県史7-2575 遺文1349
35	永禄3年	1560	4.8	今川家伝馬手形	朝比奈丹波守（親徳）が奉じて発給		反町十郎文書	県史7-2739 遺文1505
36	永禄3年	1560	4.24	今川氏真朱印状	彼印判に三浦内匠助（正俊）が判形すべし	以後は伝馬朱印状に三浦が加判すると決定	通信総合博物館所蔵文書	遺文7-2437 遺文1508
37	永禄3年	1560	9.15	朝比奈親孝等連署奉書	訴訟のため参府して子細を申すよう、今川氏真の仰せ	三浦内匠助正俊、右近将監輝平、朝比奈下野守親孝が連署、今川氏真の仰せを伝達	某氏所蔵文書	県史7-2823 遺文1578
38	永禄6年	1563	4.10	朝比奈親徳書状	三浦備後守（正俊）が訴訟を取り次ぐ 朝比奈丹波守親徳が重ねて決定を伝達		中山文書	遺文1909
39	永禄6年	1563	9.9	今川氏真判物写	奉行人による相改	遠江中安氏の知行指出問題奉行人が検査	中村文書	県史7-3153 遺文1931
40	（永禄6年頃）	1563	4.2	三浦元政・伊東元慶連署書状	遠江の中村氏に油断無き奉公を指示		中村文書	県史7-3154 遺文1933
41	永禄6年	1563	9.14	今川氏真判物写	奉行人をもって相改めるよう指示	所領に訴人・増分あれば奉行人が検査	藩中古文書	遺文1941
42	永禄7年	1564	3.30	飯尾致実書状写	忠節して討死する旨の上申を依頼	朝比奈備中守・瀬名陸奥守・瀬名中務大輔・朝比奈兵衛大夫あて	古簡編年	遺文1980
43	（未詳）		9.7	朝比奈元徳判物	神社領の寄進の保障	今川家臣発給の判物	佐野文書	県史7-3285 遺文2047
44	（未詳）		5.17	朝比奈元徳書状写	御印判の旨どおりに其方で計らうべく伝達	由比氏への氏真の仰せを伝達	国立公文書御感状写	県史7-3287 遺文2048
45	永禄10年	1567	11.5	三浦元政等連署証文写	三浦元政・金遊芳線（朝比奈）・伊左（伊東）元慶・由比内匠頭光綱が連署	氏真の仰せを伝達	友野文書	県史7-3427 遺文2155
46	永禄11年	1568	4.15	朝比奈泰朝・三浦氏満連署書状写 遊雲斎書状写	朝比奈備中守・三浦次郎左衛門と今川家臣 遊雲斎が上杉氏家老に書状（2通）	武田信玄への対策 氏真の指示で書状を出す	歴代古案	県史7-3455・3456 遺文2174・2175
47	永禄11年	1568	11.25	朝比奈泰朝・三浦氏満連署起請文写	朝比奈備中守・三浦次郎左衛門が上杉氏家老に起請	武田信玄への対策	歴代古案	県史7-3491 遺文2197

48	永禄11年	1568	1.25	匂坂直興書状	遠江井伊谷徳政訴訟につき、駿府から今川氏の下知次第であると伝達	「上様」（氏真）　匂坂は駿府に滞在して訴訟	蜂前神社文書	県史7-3439 遺文2163
49	永禄11年	1568	11.9	井伊直虎・関口氏経連署書状	遠江井伊谷徳政の実施を指示	今川氏の「御判」にしたがい実施	蜂前神社文書	県史7-3485 遺文2193
50	永禄13年	1570	1.27	武田信玄判物	駿府神門屋敷　蒜生分　壱間	領地安堵	早大荻野研究室古文書	遺文2438

＊駿府に滞在して政務に関与したことが確実な家臣の事例のみ掲出

今川氏家臣の屋敷・在駿府史料

No.	和暦	西暦	月日	史料名	事項名	内容	文書・記録名	出典刊本
51	応仁2年	1468	8.18	今川義忠書状	朝比奈若狭守が今日出府	駿河東部の合戦、朝比奈若狭守が駿府から出陣	駿河伊達文書	県史7-2566 遺文30
52	（永正）		1.6	福嶋氏春書状	来る十一日に参府	正月に家臣が駿府の今川館に参上	大福寺文書	県史7-465 遺文199
53	（永正）		5.29	福嶋範昌書状	駿州へ下り、蒲原又四郎方へ御逗留	蒲原又四郎が駿府に屋敷	大福寺文書	県史7-448 遺文210
54	大永5年	1525	1.25	宗長手記	駿河の「こう」（国府）の宗長の庵		宗長手記	県史7-855
55	大永5年	1525	12月	宗長手記	朝比奈下野守時茂の連歌会	宗長が出席	宗長手記	県史7-894
56	大永6年	1526	2.8	宗長手記	「こう」（国府）の朝比奈泰以亭		宗長手記	県史7-903
57	大永6年	1526		今川氏親葬儀記	近臣衆・家臣衆・御一家衆	近臣衆・家臣衆が氏親の葬儀に参列	増善寺文書	遺文414
58	大永6年	1526		増善寺殿葬儀之次第	岡部七郎二郎　福嶋越前 興津藤兵衛（正信） 朝比奈左京亮	今川家臣が氏親の葬儀に参列	増善寺文書	遺文415
59	享禄4年	1531	11.5	為和集	関口部大輔氏縁	冷泉為和が和歌を贈る	為和集	県史7-1133
60	天文1年	1532	3.17	為和集	瀬名五郎氏会	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1148
61	天文1年	1532	4.3	為和集	葛山中務少輔氏広亭	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1160
62	天文1年	1532	5.18	為和集	瀬名寅王丸の法楽歌会	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1167
63	天文1年	1532	11.27	今川氏輝判物	馬廻として奉公	富士宮若が氏輝の馬廻として奉公	大宮司富士家文書	県史7-1195 遺文493
64	天文3年	1534	1.20	為和集	高入道道実会	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1252
65	天文3年	1534	閏1.20	為和集	近土惣二郎氏信会	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1257
66	天文3年	1534	2.2	為和集	大浦藤二郎会	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1263
67	天文3年	1534	7.13	今川氏輝判物写	興津弥四郎（信綱）を馬廻に定める	興津氏が馬廻として奉公	興津文書	県史7-1287 遺文520
68	天文4年	1535	2.13	為和集	葛山中書（氏広）・岡部左京進（親綱）	冷泉為和が葛山・岡部に所領の訴訟	為和集	県史7-1323
69	天文4年	1535	6.4	為和集	渡辺彦二郎会	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1342
70	天文4年	1535	11.7	興津正信書状写	在府の儀も「可被得上意候」	興津氏が在駿府に今川氏の上意を得る	興津文書	県史7-1357 遺文537
71	天文5年	1535	4.27	為和集	酒井惣左衛門丞亭	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1372

72	天文5年	1535	5.24	高白斎記	福島越前守宿所	寿桂尼が福島の宿所に行く	高白斎記	県史7-1378
73	天文13年	1544	9.28	今川義元判物	海老江弥三郎の府内横田居屋敷、北安西之内屋敷分	駿府付近の河野辺内海老江方に海老江氏の所領	海老江文書	県史7-1693 遺文748
74	天文14年	1545	7.16	為和集	三浦平氏員亭	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1742
75	天文15年	1546	3.27	為和集	斎藤佐渡守元清	冷泉為和との和歌のやりとり	為和集	県史7-1786
76	天文16年	1547	6.21	為和集	葛山八郎氏元亭	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1844
77	天文16年	1547	閏7.20	為和集	葛山八郎氏元	冷泉為和との和歌会	為和集	県史7-1852
78	天文16年	1547	8.19	今川義元判物	当府に来て奉公　当府千灯院が焼失	駿河下方五社惣別当大納言が駿府で奉公	六所文書	遺文835
79	天文19年	1550	4.3	今川義元判物写	河東一乱以来、在府して奉公	阿野荘井出郷の杉山氏の在駿府奉公	国立公文書館判物証文	県史7-1984 遺文942
80	天文20年	1551	2.5	今川義元判物	在所を引き払い、当府に来て忠節	河東一乱で、富士村山の僧が駿府で奉公	村山浅間神社文書	県史7-2032 遺文996
81	天文20年	1551	11.19	今川義元判物	ただ今、在府奉公	稲葉郷伊久美氏の駿府での奉公	伊久美文書	県史7-2078 遺文1047
82	天文21年	1552	8.12	今川義元判物写	当府の居屋敷の半分を今川氏が扶助	遠州に所領もつ家臣に駿府屋敷を扶助	今宿里長所蔵文書	県史7-2140 遺文1104
83	天文23年	1554	11月	歴代序略刊語	駿城府の雪斎書院	駿府の大原雪斎の書院	安田文庫所蔵	県史7-2261
84	弘治2年	1556	10.7	言継卿記	近所の庵原左衛門尉	山科言継の宿所新光明寺の近所に庵原氏の宿所	言継卿記	史料纂集
85	弘治3年	1557	1.14	言継卿記	一宮出羽守所		言継卿記	史料纂集
86	弘治3年	1557	1.15	言継卿記	葛山近所より火事、片時に二百余間焼失		言継卿記	史料纂集
87	弘治3年	1557	2.26	言継卿記	朝比奈備中守所	朝比奈泰能（掛川城主）	言継卿記	史料纂集
88	弘治3年	1557	9.23	今川義元判物写	在府奉公	稲葉郷の伊久美氏の駿府での奉公	浅羽本系図	県史7-2587 遺文1358
89	永禄2年	1559	5.16	松平元康定書写	元康在府	松平元康が駿府から三河松平家中を支配	桑原羊次郎氏所蔵文書	県史7-2687 遺文1455
90	永禄9年	1566	9.3	今川氏真判物	四足植田喜三郎屋敷		清見寺文書	県史7-3353 遺文2104
91	永禄13年	1570	2.9	穴山信君判物写	府中窪之町　斎藤八郎左衛門屋敷		興津文書	県史7-163 遺文2442
92	永禄13年	1570	4.21	今川氏真判物写	三浦八郎左衛門尉の府中居屋敷・抱屋敷		記録御用所本古文書	県史7-遺文2482

＊『言継卿記』にみえる今川家臣の名は別表に掲出

今川氏の都市駿府政策史料

No.	和暦	西暦	月日	史料名	事項名	内容	文書・記録名	出典刊本
93	大永6年	1526	4.4	今川仮名目録	駿府の中不入地	駿府の中の不入地の破棄を宣言	今川仮名目録	県史7-916 遺文397
94	天文22年	1553	2.26	今川仮名目録追加	駿府不入事停止 馬廻は目代の手いるべからず 訴人ありて悪党ならば当職が成敗	駿府の支配は、目代・当職が関与	今川仮名目録追加	県史7-2172 遺文1130

95	天文22年	1553		今川家訴訟条目	目安箱、門の番所に出置訴訟の鐘 諸沙汰の座敷は、評定衆・奉行人が出る	今川氏の訴訟制度	今川家訴訟条目	県史7-2173 遺文1131

駿府の都市・住民史料

No.	和暦	西暦	月日	史料名	事項名	内容	文書・記録名	出典刊本
96	永正4年	1507	8.3	日海記	氏親の重代太刀が紛失	太刀は安倍河原で安東殿が発見	日海記	県史7-433
97	大永6年	1526	6.12	今川氏親朱印状	「府中西のつら、かハた彦八の川原新屋敷」	駿府の皮革職人の屋敷	駿府皮革職人文書	県史7-920 遺文399
98	享禄1年	1528	10.18	寿桂尼朱印状	「府中西のつら、かハた彦八の川原新屋敷」	駿府の皮革職人の屋敷	駿府皮革職人文書	県7-1025 遺文465
99	享禄3年	1530	3.3	実隆公記	「駿河府中二千軒回禄」	駿府の火災、二千軒が被災	実隆公記	県史7-1064
100	天文13年	1544	4.27	今川義元朱印状	皮商人の他国での売買の監視究明を皮革職人に命令		駿府皮革職人文書	県史7-1679 遺文739
101	天文17年	1548	10.28	今川義元判物	旦過河原屋敷	河原（安倍川）付近に旦過が存在	長善寺文書	県史7-1914 遺文879
102	天文18年	1549	8.24	今川義元朱印状	皮作商売　毛皮之宿での売買　今川氏の御用		駿府皮革職人文書	県史7-193 遺文905
103	天文22年	1553	2.14	今川義元判物写	友野座　　当府で前々から商人頭	諸役免許　伝馬　木綿役の保障	友野文書	県史7-2171 遺文1129
104	（天文23年）	1554	4.18	参詣道中日記	府中の宿は、おさき弥三郎	日蓮門徒大村家盛の参詣道中記	参詣道中日記	県史7-2265
105	弘治3年	1557	1.26	言継卿記	駿府は前浜から五十町ばかり、八幡付近の有東から二十町ばかり	駿府と他地点との距離	言継卿記	史料纂集
106	永禄1年	1558	閏6.23	今川義元判物	両油座・伴野	両油座・友野氏の油支配権	増善寺文書	県史7-2629 遺文1404
107	永禄4年	1561	8.2	今川氏真判物	友野氏に木綿役・胡麻油商売役を保障 酒役を免除		友野文書	県史7-2959 遺文1730
108	永禄4年	1561	8.6	今川氏真朱印状	中河大工に駿河遠江での諸役を免除	細工により今川氏に奉公	御器屋町某氏所蔵文書	県史7-2960 遺文1732
109	永禄4年	1561	11.28	今川氏真判物	年来京都上下奉公、蔵役・酒役・諸商買役免許 伝馬は自座方で商買、各別免許 京都上下の荷駄は関渡役停止		矢入文書	県史7-2991 遺文1774
110	永禄9年	1566	10.26	今川氏真判物	今宿法度（今宿商人あて）	友野座　米之座　京都運送荷物 他国商人の宿泊	判物証文写今川	県史7-3362 遺文2110
111	永禄10年	1567	8.18	今川氏真朱印状	富士郡下方段銭の勘定を豪商松木氏に命令	豪商が段銭収納に関与	松木文書	県史7ー3411 遺文2142
112	永禄12年	1569	6.24	今川氏真判物写	駿州府中四足町四条清四郎居屋敷	分国中商売諸役免許　京都伝馬上下	本多氏古文書	県史8-35 遺文2403

駿府の寺社地史料

No.	和暦	西暦	月日	史料名	事項名	内容	文書・記録名	出典刊本
113	文亀1年	1501	11.21	今川氏親禁制	新長谷寺　参詣の輩	参詣者の歌声・夜の参詣などを禁止	長谷寺文書	県史7-335
114	永正6年	1509	9.6	今川氏親判物写	当府内寺中屋敷・玉屋舗	駿府の宝樹院の寺地・屋敷を記載	新善光寺文書	県史7-499 遺文227
115	永正11年	1514	8.18	今川氏親禁制	大くるい・昼寝・笛・尺八・歌・修行者の宿泊	参詣者の不作法・音曲・宿泊を禁止	長谷寺文書	県史7-606 遺文273

116	享禄3年	1530	3.18	寿桂尼朱印状	「国分寺の内給主安西寺方、国大くかた、東は道を限り三十三間、西は薬師の道を限り拾五間、南おもて五十間、北四十弐間、合千参百坪、ほか国大工かた表の道分四拾弐坪」	新長谷寺買地の諸役停止 国大工方	清水寺所蔵長谷寺文書	県史7-1067 遺文471
117	天文1年	1532	9.19	今川氏輝判物	一花堂の所々寺領屋敷　安西寺領屋敷	寺領の安堵	長善寺文書	県史7-1184 遺文489
118	天文11年	1542	9.13	今川義元判物	「安東築地屋敷　東西弐拾九間　南北四拾九間 千六百弐拾歩　以上四段半」	関口刑部が寄進した浅間新宮神主の領地を安堵	静岡浅間神社文書	県史7-1594 遺文686
119	天文13年	1544	11.27	為和集	国分寺	冷泉為和が今川義元とともに和歌会	為和集	県史7-1705
120	天文13年	1544	12.12	東国紀行	府中の一花堂（長善寺）に立ち寄る	連歌師宗牧の紀行文	東国紀行	県史7-1716
121	天文20年	1551	7.15	今川義元判物写	駿州城府大龍山臨済寺寺領	門前屋敷壱間、蒲原三郎に替地を与え、寺に寄進	臨済寺文書	県史7-2056 遺文1026
122	弘治2年	1556	11.18	言継卿記	華陽院の庭園　「士峯」（富士）の景色	山科言継が見物	言継卿記	史料纂集
123	弘治2年	1556	11.23	言継卿記	言継が臨済寺の仏殿・方丈を見物	駿府大岩の臨済寺	言継卿記	史料纂集
124	弘治2年	1556	12.8	言継卿記	浅間神社の常光院の庭 国分寺の宝幢院の座敷・庭	言継が見物	言継卿記	史料纂集
125	弘治3年	1557	2.12	言継卿記	新光明寺の庭で女房狂言の勧進 狂言を六番上演、500～600人が見物	言継の宿所は新光明寺（当時は寺内の周等庵）	言継卿記	史料纂集
126	弘治3年	1557	2.13	言継卿記	新光明寺の庭で女房狂言の勧進 今川家臣も見物、1400～1500人が見物		言継卿記	史料纂集
127	弘治3年	1557	2.8	言継卿記	言継が国分寺の薬師と長谷の観音を見物		言継卿記	史料纂集
128	弘治3年	1557	2.22	言継卿記	浅間神社廿日会祭	言継・今川家臣が桟敷を構えて見物	言継卿記	史料纂集
129	弘治3年	1557	2.24	言継卿記	言継が大岩今林寺の名花を見物	臨済寺のある大岩に今川氏の菩提寺今林寺	言継卿記	史料纂集
130	永禄3年	1560	12.12	今川氏真判物写	町の宮屋敷の地子	浅間神社の庁守が町の地子の徴収権	浅間社人庁守文書	県史7-2868 遺文1623
131	永禄4年	1561		心珠詠藻	駿州国府一花堂（時衆寺院長善寺）にて連歌	長伝の紀行文	心珠詠藻	県史7-3001
132	永禄9年	1566	9.3	今川氏真判物	府中天沢寺領の府内志田垣屋敷	屋敷は武田左京亮から買得面屋敷・裏屋敷あり	清見寺文書	県史7-3353 遺文2104
133	永禄10年	1567		紹巴富士見道記	府中の長善寺（一花堂）に寄る	連歌師里村紹巴の富士見紀行	紹巴富士見道記	県史7-3395
134	元亀1年	1570	6.16	武田家朱印状	今宿の雷宮屋敷	今宿は現在の七間町の別雷神社	別雷神社文書	県史8-226

＜補足資料③＞

公家山科言継の日記『言継卿記』の駿府在住
今川家臣・侍女　弘治2～3（1556～57）年

静岡市文化振興財団　廣田浩治・鈴木将典

今川家臣

No.	人名	役職・職務・事項	『言継卿記』記載年月日
1	朝比奈左京亮（泰朝）	朝比奈備中守泰能の子、正月に今川館に出仕 浅間神社廿日会祭礼を見物	弘治3/1/11、22、2/4、13、22、28、30
2	朝比奈下野守（時茂）	言継と交流　今川義元の和歌会に同席	弘治2/11/23、、弘治3/2/4、25、28
3	朝比奈丹後守	言継と交流	弘治2/12/18
4	朝比奈丹波守（親徳）	言継とともに今川氏真の和歌会に同席 今川義元の和歌会に同席	弘治3/1/13、2/25
5	朝比奈備中守（泰能）	遠江掛川城主、正月に今川館に出仕 言継から上洛の送り伝馬の依頼を受ける	弘治3/1/11、19、22、25、27、2/4、22、26、27、28、29、30、3/1、3
6	朝比奈孫一郎	言継と駿府の報土寺に参詣	弘治2/11/12
7	甘利佐渡守	大方（寿桂尼）の膳方の奉行5人の内 言継と交流 寿桂尼・今川義元と言継を取り次ぐ 寿桂尼の取次	弘治2/9/25、27、10/10、20、23、28、29、11/15、19、20、21、22、23、26、12/6、7、10、30、 弘治3/1/3、4、5、10、12、18 2/3、4、12、14、16、19、21、22、26、27、29、30、3/1
8	甘利太郎右衛門	寿桂尼の膳方奉行の甘利佐渡守・福島八郎右衛門とともに言継と交流	弘治2/9/26、11/1、11/15、21、弘治3/1/18、2/4、9、30
9	甘利万徳	言継と交流	弘治3/2/22
10	粟屋左衛門尉	言継と交流　今川義元の和歌会に同席	弘治3/2/1、4、25
11	一宮三郎	言継と交流	弘治3/1/15
12	一宮彦三郎	今川義元の和歌会に同席	弘治3/1/29　一宮彦三郎と同一人物か
13	一宮出羽守	言継と交流　言継と今川義元の対面・和歌・酒宴に同席 言継とともに今川氏真の和歌会に同席 今川義元の和歌会に同席	弘治2/10/11、23、25、11/19、20、12/6、8、30、 弘治3/1/7、12、13、14、29、2/1、2/5、13、17、2/25
14	稲垣玄蕃允	言継の訪問を今川氏真に取り次ぐ	弘治2/12/30
15	井上藤九郎	朝比奈左京亮の取次	弘治3/1/22
16	飯尾若狭守	言継の今川氏真訪問を迎える　今川義元の和歌会に同席	弘治3/1/5、13、2/25
17	飯尾長門守	言継と母（御黒木）を取り次ぐ 今川氏真に対面する言継を出迎え 言継からの伝馬過書の発行の依頼を取り次ぐ	弘治2/9/26、10/23、25、11/19、20、21、23、26、27、29、12/2、3、4、7、 弘治3/1/10、12、13、2/4、5、10、17、29、3/1
18	庵原左衛門尉	言継の宿所新光明寺の近所に居住　言継と交流	弘治2/10/7、11/12
19	岩本六郎右衛門	言継と交流　言継の訪問を寿桂尼に取り次ぐ	弘治2/12/18、21、30、 弘治3/2/4、28、3/1
20	大野見掃部助	言継と交流	弘治2/9/28、10/24、27、11/10、 弘治3/1/2、19、2/1、27
21	岡部太郎左衛門	言継とともに今川氏真の和歌会に同席	弘治3/1/13、22、2/25

22	小原伊豆守	今川氏真の使い　言継とともに今川氏真の和歌会に同席	弘治3/1/10、13、16、2/25
23	各和式部少輔	今川義元の和歌会に同席 浅間神社廿日会祭礼を見物	弘治3/1/29、2/22、23、25
24	糟屋小二郎	言継と交流	弘治3/2/22
25	葛山左衛門佐	言継とともに今川氏真の和歌会に同席	弘治3/1/13、25
26	葛山三郎	言継と交流　今川義元の和歌会に同席	弘治2/12/10、弘治3/1/29
27	神尾対馬入道	言継の上洛経費の調達を担当　浅間神社廿日会祭礼を見物	弘治2/12/16、弘治3/1/9、12、2/4、22
28	蒲原右衛門尉（元賢）	今川義元の和歌会に同席　言継の名所見物の案内 浅間神社廿日会祭礼を見物	弘治3/1/29、2/14、15、16、2/22、29、30
29	蒲原右近	言継とともに今川氏真の和歌会に同席 今川義元の和歌会に同席	弘治3/1/13、2/25
30	岸彦太郎	寿桂尼の使い	弘治2/12/30
31	福島左衛門	言継と交流	弘治2/11/26
32	福島八郎左衛門	大方（寿桂尼）の膳方の奉行5人の内 言継と交流 寿桂尼と言継を取り次ぐ	弘治2/9/25、27、10/28、29、12/10、12/19、 弘治3/1/12、15、25、2/4、12、13、15、16、26、29、30、3/1
33	斎藤佐渡守（元清）	言継と交流　言継と今川義元の対面・和歌・酒宴に同席 今川氏真に対面する言継を出迎え 言継の名所見物の案内を義元から拝命	弘治2/11/12、15、19、20、21、22、 弘治3/1/13、15、2/11、12、14、15、16、19、21、22、25、28、30
34	斎藤弾正忠	斎藤佐渡守の子　言継と交流 今川義元の和歌会に同席　言継の清見寺見物を案内	弘治2/11/12、22、25、 弘治3/1/15、29、2/5、6、30
35	関口刑部少輔（氏純）	言継と今川義元の対面・和歌・酒宴に同席 言継と今川氏真の対面に同席	弘治2/11/19、20、21、22、 弘治3/1/5、15、22
36	関口刑部大輔（氏縁）	言継と今川氏真の対面に同席	弘治3/1/5
37	瀬名氏俊の子息虎王	言継と交流	弘治2/12/14、弘治3/1/5
38	瀬名貞綱の室（新造）	義元の姉　言継と交流	弘治2/11/28、弘治3/1/5、2/1
39	瀬名孫十郎	今川一家衆　今川義元の和歌会に同席 言継と交流	弘治3/1/29、2/1
40	高屋弥二郎	言継と交流	弘治3/2/22
41	新野彦十郎	今川義元の和歌会に同席	弘治3/2/25
42	牧四郎兵衛	言継と交流	弘治2/11/28、30
43	牧四郎右衛門	言継と交流	弘治2/12/3
44	松平和泉守（家乗）	言継と交流　三河の武家	弘治3/1/5、6、8、9、10、12、14、2/4、29
45	三浦上野介	言継と交流　言継とともに今川氏真の和歌会に同席	弘治2/11/22、弘治3/1/13、2/25
46	三浦内匠助	言継と今川氏真を取り次ぐ　今川義元の和歌会に同席	弘治2/11/19、20、21、22、23、26、 弘治3/1/5、2/25、29

47	牟礼次郎	牟礼備前守の子　言継と交流	弘治2/10/1
48	牟礼長門守	言継と交流	弘治3/2/29
49	牟礼備前守	言継と母（御黒木）を取り次ぐ 言継と今川義元の対面・和歌・酒宴に同席 今川氏真に対面する言継を出迎え 浅間神社廿日会祭礼を見物	弘治2/9/26、27、10/1、11/19、20、21、22、23、26、12/2、3、4、5、7、 弘治3/1/20、22、2/22、28、29、30、3/1
50	矢部縫殿允	言継と交流	弘治3/2/30、3/1
51	由比主計允	今川義元の和歌会に同席	弘治3/2/25
52	由比五郎右衛門	言継の訪問を今川義元に取り次ぐ	弘治2/12/30
53	由比左近	言継と交流	弘治3/2/4、22
54	由比十郎兵衛	由比四郎右兵衛の弟　浅間神社廿日会祭礼を見物	弘治3/2/22
55	由比四郎右衛門	言継と交流	弘治2/12/18
56	由比四郎右兵衛（光綱）	言継と交流　浅間神社廿日会祭礼を見物 今川義元の和歌会に同席	弘治2/12/18、弘治3/2/22、25
57	由比助右衛門	由比四郎左衛門の同名	弘治2/12/25
58	良智三郎左衛門尉	寿桂尼の使い	弘治3/1/24
59	藁科彦九郎	寿桂尼の取次　寿桂尼の湯山温泉行に同行　言継と交流	弘治2/10/19、11/15、21、26、12/1、 弘治3/2/4、14、16、22、30、3/1

侍女

60	あこう	寿桂尼の侍女	弘治2/11/3、弘治3/2/9
61	奥殿	寿桂尼の侍女	弘治2/11/3、8、15、12/7、 弘治3/1/17、2/9、29
62	小宰相	寿桂尼の侍女	弘治3/1/16、2/9、15、29
63	新大夫	寿桂尼の中臈	弘治2/11/28、12/30
64	茶阿	寿桂尼の小官女	弘治2/11/28

その他

65	宮内卿	今川氏配下の「作工者」	弘治2/11/5

＜補足資料④＞　史料本文

静岡市文化振興財団　廣田浩治・鈴木将典

【史料１】今川仮名目録
（出典：県史７-916　内容：今川館の出仕の座席）

九六　今川仮名目録

一三浦二郎左衛門尉、朝比奈又太郎、出仕の座敷さたまるうへハ、自余の面々ハ、あなかち事を定むるに不及、見合てよき様に、相はからハるへき也、惣別弓矢の上にあらすして、意趣をかけ、座敷にての事を心かくる人、比興の事也、将又勧進猿楽、田楽、曲舞の時、桟敷之事、自今以後、圖次第に沙汰あるへき也、

【史料２】為和集
（出典：県史 7-1785　内容：今川義元の北の亭）

一七五　為和集　五　宮内庁書陵部所蔵　〇東京都

花下述懐　同廿四日（三月）大守（今川義元）之北の亭にて花見之返也、

吹しほる花ハ中〳〵風のまも色にみたるゝ桜人かな

【史料３】高白斎記
（出典：県史 7-1968
内容：今川館の数寄屋の座）

一九六　高白斎記

十九日甲申、駿府（安倍郡）へ為御使者高白（駒井政武）参ル、岩間（甲斐国）ニ泊ル、伝馬十疋、廿二日酉刻駿府へ着、廿三日戊子酉刻義元（今川）御対面、戌刻御口上ノ段申渡ス、廿七日御振舞東林へ御脇指被下候、指刀進上、作彦四郎ニテ候、廿九日重テ御振舞、於御数奇屋ノ座、御茶・御酒・御太刀被下、栗毛糟毛ノ馬進上、〇中略二日酉刻致帰府（甲斐国）、御返事ノ趣披露仕候、

【史料４】今川家諸宗礼式写
（出典：県史 7-2026　内容：今川館の年始礼）

一年始の御礼ニ参寺庵之僧・沙弥・小法師体の者まて、たよりよけれハ御対面とて、うへをしたへとひこへはねこへまち出るハ、あまりに見くるしく候、さやうにハ有ましき事なり、八日にハ早朝ニ新宮（駿府浅間社）・総社両神主まいりて、惣持院別当御対面有て後、御祈願所寺々府中・府外先例より参つけたるハかりハ不及沙汰、近年屋敷一所給たる小寺の坊主まて、名聞ニふけり出る者限もなし、此類ハ皆御茶にても巻数にても、進物計披露有てかへさるへきなり、もし又子細有て御対可有人ハ、何時も事の次第を以可申入よしさためらるへきなり、

庚戌（天文十九年）十二月十一日　　（大原）崇孚判

【史料５】言継卿記

（出典：弘治２／10／2、10
内容：寿桂尼亭）

二日、丁亥、天晴、○今日大方、中御門女中、大方之孫（相州北條次男也、）等湯山ゟ被越云々、仍各留守之間午下刻老母見舞に罷向、牛黄圓、麝香丸二貝宛進之、先雜煮にて一盞有之、次大方之庭等見物、次晩飡有之、供衆各迄有之云云、戌刻迄雜談、次罷歸了、次大澤左衛門大夫、住持、納所、喝食松的等招寄一盞勸了、暫雜談、予喝食に竹門御筆短冊二枚遣之、

十日、乙未、天晴、五墓日、天一天上、○從御黑木被呼朝飡罷向了、未刻（昆布一包隨身進之、熟柿一盞賜之、）計罷向了、大方之座敷、持佛堂以下見物了、先之今朝住持へ一竹四穴調之遣了、次中酒とて鈴被送之、罷歸之後住持招寄一盞勸了、次酉下刻甘利佐渡守鈴一對、古酒、食籠持來、住持招寄及數盃了、暫雜談有之、

【史料６】言継卿記

（出典：弘治２／11／19　内容：今川義元亭）

十九日、甲戌、天晴、○齋藤佐渡守ゟ以隼人扇二本遣之、一宮出羽守兩所へ、今日於太守入魂頼入之由申遣了、次自三條亞相木村左衛門大夫爲使來、今日自太守被呼之間可同道之由有之、幷絹之直垂有由緒之間令着之間、予に內々案內云々、令對面返答申候了、次自御黑木餅一盆賜之、次牟禮備前守來、餅一盆送之、同甘利佐渡守來、一盞勸了、次御黑木へ罷向、朝飡有之、次未下刻甘利佐渡守迎に來、自路次牟禮同々道、三條亞相へ罷向、中御門同被來、各令同道太守ゟ罷向、門外迄一宮出羽守、齋藤佐渡守等出向、奏者飯尾長門守也、則太守被出合、鑢短冊取之、當座有之、予卷頭讀之、雖斟酌堅被申之、十首也、三、予、中、太守、關口刑部少輔、木村左衛門大夫、澤路隼人佑、一宮出羽守、牟禮備前守、齋藤佐渡守等一首宛也、次關口讀揚之、三、予、中等歌三反、太守之歌二反讀之、予歌如此、寒草霜、（華人代、）旅行、

袖ふれて千世や經ぬへき今朝さらに山路の秋を霜のしら菊

文かきてつてやりぬへきたよりさへしらす過來しうつの山こえ

次盃出、湯漬有之、七五三也、相伴衆和歌之人數計也、盃三出、初獻三亞被始、二獻予、三獻太守、予酌取之、二獻之時菓子七種、結花、折一合出、三獻之時、自大方食籠出了、盃及再反及數盃了、太守近年之機嫌云々、先予太刀出之、關口持て出、次勅筆之百人一首、置引合十帖之上出之、飯尾長門守持出、次酒之內に桂蓮院宮詩歌二首つゝ、出之、大澤左衛門持出、予取之直に出之、被頂戴被祝着了、戌刻計各罷歸了、直御黑木ゟ罷向、樣體雜談申候了、牟禮是迄被送、次歸寺、甘利送に來、次住持へ一盞勸了、五郎殿者、今日可入夜之間明日可來之由有之、

【史料７】言継卿記

（出典：弘治２／11／20　内容：今川氏真亭）

廿日、乙亥、天晴、終日寒嵐、〇三條亞相、一宮、齋藤、牟禮、飯尾、甘利等所へ、早々爲禮隼人佑遣之、自三又木村爲使來、對面了、次大澤、三浦內匠所へ罷向、五郎殿へ時分相尋之處、晩景之由有之云々、飯尾長門今日禮に可來之由案內云々、次淨蓮來、今日齋藤彈正忠佐渡守也可禮來之由案內也、次住持招寄茶子にて勸茶、又餠一盆送之、次齋藤彈正禮に來、鴈、一、干魚一折、蜜柑一折、樽一荷送之、對面一盞勸了、淨蓮令同道了、次住持、良一座頭來談、茶子餠にて勸茶、次甘利佐渡守自太守爲使來、明日晩飡に可來之由有之、勸一盞及數盃了、次飯尾長門守禮に來、樽代五十疋持來、則五郎殿へ同道、迎に齋藤佐渡守、牟禮備前守、飯尾長門守、甘利佐渡守來同道、中門外迄三浦內匠出合奏者、五郎殿被出、太刀、竹門之御筆自讀歌百人一首出之、次盃出引渡、寒酒にて一獻了、相伴關口刑部少輔計也、則罷歸、庭迄三度被送了、昨日太守同前、中門外迄關口以下十人計送了、次牟禮、甘利等同道、御黑木ゐ罷向雜談、酒有之、及數盃、戌下刻罷歸了、牟禮此方迄被送了、次三浦內匠助太刀にて禮に來云々、

【史料８】言継卿記

（出典：弘治３／２／25　内容：氏真亭での和歌会）

廿五日、己酉、天晴、天一下良、〇早々以隼人佑飯尾長門守、三浦內匠助所へ、來廿八日上洛之案內、傳馬等之事、太守、五郎殿へ可申之由申遣了、同甘利佐渡守へ大方へ案內之事申遣了、次御黑木へ罷向、次三條へ罷向、飯尾若狹守迎に來、三、予。勝路令同道、五郎殿へ罷向、則各置懷紙、卅二人、次短冊卅五首、硯蓋に予盛之、當座有之、人數三條亞相、予、太守、五郎、總持院勝路上人、富樫二郎、武田左京亮、各和式部少輔、葛山左衞門佐、新野彦十郎、三浦上野介、一宮出羽守、木村左衞門大夫、澤路隼人佑、齋藤佐渡守、粟屋左衞門尉、最勝院、同子千菊、進藤彈正少弼、小原伊豆守、蒲原右近、岡邊太郎左衞門、朝比奈丹波守、由比玄陽、朝比奈下野守、飯尾若狹守、由比四郎右兵衞、同主計允、醫者德源寺、孝甫、系以、三浦內匠等也、最勝院素經懷紙等讀揚之、次晩飡有之、觀世神六、同二郎大夫迄相伴廿八人云々、三、予兩人二首つゝ也、其外各一首也、予和歌懷紙、

詠歸鴈越嶺和歌

正二位言繼

一つらの峯行かりも故郷に花の錦やきて歸るらん

山中瀧水

おくふかく雪も氷もとけぬらん瀧のひゝきの山ともよむまて

同當座春駒嘶、忍待戀、

いかにしてみしかき野への若草のいはゆる駒をつなきとむらん

よそに先たくへてもしれ吹となき風にも絕すなを松の聲

隼人佑代河上氷、

たえす行なかれの末の河波はいつのよとみの氷そむらむ

【史料９】今川家訴訟条目
（出典：県史 7-2173
内容：駿府の今川氏の評定制度）

二七三　今川訴訟条目

定

一毎月評定六ヶ日、二日・六日・十一日者、駿遠両国之公事を沙汰すへし、十六日・廿一日・廿六日ハ、三州之公事を沙汰すへし、但、半年は三州在国すへきの間、彼国にをひて、諸公事裁断すへし、雖然急用のため、三日相定の日、宿老幷奉行人数、已之時よりあつまり、申刻まて、諸公事儀定、披露怠慢せしむへからす、此六ヶ日之外、訴訟・公事・急用之注進等ハ、夜中を論せす、可令披露也、

【史料 10】今川氏輝判物
（出典：県史 7-1287
内容：家臣が馬廻に指名され奉公）

二八七　今川氏輝判物写　諸家文書纂所収興津文書

駿遠両国当知行分之事

一興津郷(駿河国庵原郡)内堀内分幷薩埵山警固関
西谷方山脇事

一河辺地頭方(駿河国安倍郡)幷(駿河国有度郡)入江庄内法性寺米、

一河辺枝郷小黒之内五町(狐)此内きつねかさきに(崎)壱丁ふす、

一池田(庵原郡)　一村岡郷(遠江国城飼郡)西方

一垂木郷(遠江国佐野郡)介一為御給恩被下幷御代官職

右条々、如前々不可有相違、将又子(信綱)弥四郎馬廻仁相定上者、弥所可抽奉公、仍如件、

天文三甲午年七月十三日　　(今川)氏輝（花押）

興津藤兵衛尉(正信)殿

【史料 11】興津正信書状写
（出典：県史 7-1357
内容：駿府滞在に今川氏の許可が必要）

二三七　興津正信書状写　諸家文書纂所収興津文書

尚以在府(駿府)之儀も可被得御上意候、尤候、家に候可仰之下□

知行以下名代事、面々へさしまかせ候、いろひ候間敷候、於此上、正信(興津)勘忍分之儀者、以面可致談合候、奉公之儀、万可然様可□　□以前請文以申之間、重而不及申候、大坂之儀外聞ニ候、早々可被申立候、名代さしまかせ候之間、可被懸(御意カ)之事目出候、恐々謹言、

天文四乙未霜月七日　　藤兵衛尉正信（花押）

(興津信綱)弥四郎殿

【史料 12】今川義元判物写
（出典：県史 7-2140
内容：家臣の駿府屋敷に対する補助）

二四〇　今川義元判物写　駿河志料巻八十三今宿里長所蔵文書

遠江国榛原郡江富郷之内、小泉又七分拾四石七斗参升余、幷大畠藤七郎分拾参石壱斗、都合此俵(俵)七拾表四升余也、自前々為給恩宛行之処、年来令河成弐拾八俵壱斗余令所務之云々、然者彼荒地芝河原以下、如前規領掌之間、開発次第可所務、於向後、雖有競望之輩不可許容、此外於清水屋敷参間、田地弐段、当府(駿河国安倍郡)居屋敷半分令扶助候間、如前々永不可相違、弥可相続奉公者也、仍如件、

天文廿一年八月十二日　　(今川義元)治部大輔

○宛所を欠く。

【史料 13】今川仮名目録追加
（出典：県史 7-2172　内容：駿府の支配機構）

三七三　今川仮名目録追加

かな目録追加

一駿府（駿河国安倍郡）不入之事停止之由、かな目録に有うへハ、不及沙汰と云共、馬廻之事ハ、目代の手いるへからさる由、近年申来之間、近日及沙汰、悪党之事ハ、家財あらたむるに不及、雑物一色あひそへわたすへきよし、議定畢、并不入之地準之、但家来之悪党を、家来之者聞立、成敗する事ハ、他之云事なき間、不及是非、訴人ありて申出悪党に至てハ、当職に渡置、可成敗也、又自当職申付者、悪党拘置にをいてハ、重罪の間、別而可加成敗也、か様之儀申出者にをいてハ、かゝへをくものゝ家財以下出置、其上可為褒美也、

【史料 14】今川家訴訟条目
（出典：県史 7-2173　内容：駿府の訴訟制度と目安箱）

三七四　今川訴訟条目

定

一たよりなき者訴訟のため、目安之箱、毎日門之番所に出置上ハ、たしかにはこに入て、毎月六度之評定にこれをひらき、名を沙汰し定へき也、但誰なにかし、いつれの在所と云事、名不実之者、訴訟と号し、彼箱になけ入、落書同然に披露すへきにをひてハ、讒言のわさはひたるへし、所詮五日に一度之評定の当日に、彼訴訟之人、門外に祗候せしめ、箱之内之目安、一度に合点せさる訴訟人ハ、落書たるへきの間、則衆中として、焼すつへし、若又其日不出合ハ、重而以目安可申事

一互の目目安向雖遂裁許、三十日を経て、奉行人披露なきにをひてハ、訴訟之鐘をつくへし、但公事おほきに付、遅引の事あらハ、論人、訴人共に、奉行人かたより、其旨をあひことハるへき事

＜執筆者一覧＞

小和田 哲男（おわだてつお）	静岡大学名誉教授
仁木 宏（にきひろし）	大阪公立大学大学院文学研究科教授
小野 正敏（おのまさとし）	国立歴史民俗博物館名誉教授
河合 修（かわいおさむ）	静岡県文化財課
山本 宏司（やまもとこうじ）	元静岡市文化財課
廣田 浩治（ひろたこうじ）	静岡市文化振興財団
鈴木 将典（すずきまさのり）	静岡市文化振興財団

（資料集掲載順、敬称略）

令和５（2023）年２月４日　発行

シンポジウム 今川館の姿にせまる　資料集

編集・発行　静岡市（観光交流文化局歴史文化課）
印刷　池田屋印刷株式会社